

ハイスクールD×D 奇跡 の天使

瑠夏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天使と人間の間に生まれた「奇跡の子」、七星十香。

《天使》に選ばれた十香が世界の表に現れる時、神々含む全勢力が動き出す。

プロローグ プロローグ

天使は子供を産むことはできない。

正確には、天使が墮天しないよう様々な儀式を施した後、一切の邪な感情を抱いくことなく行為に及ばなければならぬという、非常に厳しい制限がつく故に、産むことが難しい。

一瞬でも快樂に身を任せてしまうと、それだけで墮天してしまう。行為に及んで邪な感情を抱かないなど不可能に近い。故に、子供を産むことができないと言つても過言では無い。

事実、何百、何千と生きている天使の中で子供を産んだ経験のある者はゼロだ。

今後もし、天使が子供を産むことは無いだろう。そもそもそういった想像すらできないであろう天使たちでは、一生ありえない。

そう思われていた矢先のことだ。

一人の女性天使が人間の男と結婚した。女性天使は、天界でもトップの階級に立つ熾天使（セラフ）の一人。

それだけでも天界全土に驚きを与えたというのに、それを超える驚きが後に知らされた。

それは、人間と結ばれた熾天使のジブリールが墮天することなく妊娠したということだった。

☆☆☆☆

天界に産まれた天使と人間のハーフ。

名前を七星十香。結婚相手の男が日本人であったため、名前をそちらに寄せたいとジブリールがお願いしようだった。

天界では十香のことを天使の出産など絶対にありえないとされていたため、「奇跡の子」とも呼ばれるようになっていた。

だが、十香が本当の意味で「奇跡の子」と認識される事実が発覚する。

亡くなった聖書の神が残した、天使の名を冠する武器。神々すら屠ることができる強力な力を秘めた《天使》。人間でなくては扱うことができず、素人の人間でも上級悪魔を倒すことが可能で、記録では戦闘の素人が最上級悪魔すら追い詰めたとされている。

天界を除いた全勢力が警戒し怯えるほどの力を持った《天使》を、十香は産まれながらに宿していたのだ。

本来ならありえない天使の子供に、人間の血が混ざってたが故に、選ばれた《天使》。これを奇跡と言わずして何というのか。

十香の存在は、天界のトップである熾天使だけの秘密とすることとなる。「奇跡の子」が《天使》に選ばれたとなると、悪魔、墮天使はおろか神々すら手を出してくる可能性が非常に高い。

だが、完璧に隠蔽することは不可能だ。勘の鋭い者なら、個人を特定はできないだろうが誰かが《天使》に選ばれたと気づいているだろう。

とは言っても、それが十香だとは気付かれにくいはずだ。天使の子供が《天使》に選ばれた、なんて冗談みたいな存在がいるなんて想像もできない内容だ。もし想像した者がいたとしても妄想だと切り捨てられることが目に見えている。

ならば、一番警戒しなくてはならないのが「奇跡の子」たる十香の存在を知っている天界そのものだ。

その後すぐに天界全階層に、十香の存在は外へ絶対にバラさないようにと通達されたのだった。

聖書の神が残した言葉にこういう一節がある。

『真に相応しい《天使》の使い手が現れた時。世界を脅威から救うだろう』——と。

一人の女の子が《天使》に選ばれ、この世に生まれた瞬間から世界の歯車は動き出す。

1話 七星十香

天界の第六天。

天界の中枢機関である『ゼブル』に、二人の熾天使が並び立っていた。

金色に光る翼を持つているのが、『四大熾天使』であり、天使長であるミカエル。

ミカエルの隣にいるのは十二枚の翼を持った女性天使。

頭上には光輪があり、天使であることを証明する美しい純白の翼。長く流れるような髪は、庭園に吹く風でなびき、そのつど、プリズムのように光を反射させ、虹のように見える。

彼女こそ、天界一の美女と名高いガブリエルに並ぶほどの美しさを持ち、天使では初めての子供を産んだジブリエルだ。

「ミカエルさま、このジブリエルになにかご用でも？」

「ええ。先日、協会から聖剣エクスカリバーがグリゴリの幹部、コカビエルに盗まれたのを覚えていますか？」

「もちろんでございます」

忘れるはずが無いだろう。折れた破片から七本に分かれた聖剣エクスカリバー。一

本一本に特殊な能力がついた悪魔には効果抜群の聖剣だ。

それが墮天使……それも幹部のコカビエルに盗まれたと知らされたときはジブリーでさへ驚いた出来事だ。

「奪われたエクスカリバーは三本。教会から、ゼノヴィアと紫藤イリナの二人が回収、それが無理なら破壊するよう動いてもらっているわけです。が、彼女たちには申し訳ないですが、二人では力不足です。いくら聖剣を持っていたとしてもコカビエルには歯が立たないでしょう」

コカビエルは先の戦争を生き残り、聖書にすら記されている実力者だ。まだ年若く、聖剣を扱いきれしていない彼女たちでは傷一つ付けることはできないだろう。

かといって、ミカエルたち天使が出張るわけにはいかない。コカビエルが潜伏している場所は人間界の駒王町だ。あの場所は悪魔が領地にしており、敵対している相手の領地に天使が直接介入してしまうと悪魔との戦争になりかねない。戦争だけは絶対に起こしてはいけない。今度こそ天使も悪魔も滅んでしまう。

天使の介入をできるだけ避けて問題を解決したい。故に、教会から戦士を送り出したのだが……。

「これは他の熾天使にも聞いたことですが、こちらから十香を増援として向かわせてはどうか？」と

「……っ!？」

「彼女ももう十七歳です。私達と比べれば少な過ぎる年数ですが、彼女はもう立派な天使です」

「それは……そうですが……」

ジブリールは何か言いたそうにしていたが、結局何も言わず、口ごもってしまふ。

彼女が何を言いたかったのか。ミカエルはわかっていた。簡単なことだ。親が子を心配しているのだ。どこに、まだ十七年しか生きて居ない娘を、何千年と生きてきた怪物と戦わせたいという親がいるだろうか。普段、巫山戯た態度の多いジブリールでも、顔には行かせたくないと思っていた。

「それに、そろそろ十香には表舞台に出てきてもらおうと思つています。彼女の存在は特別です。いつまでも隠し通せるものではありません。だから私は、今度行われるであろう会談で彼女を公表しようと考えています。その為に、彼女の實力を示すと同時に、十香に悪魔と墮天使がどういふ存在なのかを知ってもらうつもりです」

言い方は悪いが、十香を表に出すにはふさわしい舞台が今整つている。それを利用しない手はない。ミカエルはそう考えている。

が、

「……………」

十香の母親であるジブリールは、当然頷くことはない。もし、万が一が起きてしまえばと思うと、軽く頷ける案件ではない。

ミカエルも重々の上だ。その上で、十香が表に出るのは今後の世界には必要だと思っ
ている。

「ジブリール、あなたも知っているはずですよ。彼女の實力を。コカビエルは確かに強い。素の……天使だけの十香なら互角、いやそれ以上でしょう。しかし、『天使』を使えばその限りではありません。神々ですら斬る力を、十香は使いこなしています。今回はまだ天使と人間のハーフだとは隠して、『天使』の方を使ってもらうので、コカビエルが彼女に勝つ可能性は限りなくゼロです」

ミカエルが理解していて、親のジブリールがわかっていないはずがない。だが、それでも心配なのが親心というやつだろう。だからミカエルは、これならジブリールも納得するであろう言葉を言った。

「そこまで心配なら、あなたも一緒に行つてきても良いですよ。勿論、十香には内緒で、
ですが」

ミカエルが提案した内容に、ジブリールが驚いた顔をしてこちらを見ていた。

「ジブリールがこんな顔をするなんて珍しい。」

だが、彼女が驚くのも無理はない。天使の介入は無しだと言っているそばから、悪魔

の領地に行っても良いと言っているのだ。

「ただしジブリール。あなたの介入は一切認めません。それに伴って、力は最大限まで抑え、できる限り遠く離れてをお願いします」

「かしこまりました！」

先ほどまでの憂が嘘のように明るくなるジブリール。暗くなられるよりはまじだが、この切り替えの早さにはミカエルも苦笑する他なかった。

「では、十香にはあなたから伝えておいてください。私はグリゴリの動向を見張らなければなりませんから。——あ、明日十香に、夜に私のところに来るように言ってもらっていいですか？　行く前に私も少し話したいことがありますから」

ミカエルはそう言うと、金色の翼を広げて飛び立った。

☆☆☆☆

七星十香は、特別な存在だ。

例え本人が否定しようと、それは紛れもない事実だ。不可能と言われていた天使の子供であり、人間とのハーフだったが故に神すら殺す力を入れた。冗談みたいな存在というのは、十香にこそ相応しい。

そんな「奇跡の子」と呼ばれる十香は今、夕食を作っていた。

今日の献立はシチューだ。既に料理は完成しているが、十香は母親のジブリールを待っていた。

「遅いなーお母さん。いつもならもう帰ってきてる頃なのに……。何かあったのかな？」

外したエプロンを綺麗に畳んでテーブルに置き、姿見の前まで移動する。

姿見が十香の全身を映し出す。

そこに写っていたのは、暴力的なまでの美しさを持った一人の女の子だった。

太もも付近まで伸びた闇色の髪は、日の光など浴びずとも、艶々と照り輝いており、服の上からでもわかるほど身体全体の肉付けは良く、そこから伸びる手足は見るものを感わす艶かしさがある。

肉付けが良いだけあって、立派な双丘を持っている。

何より、女神ですら嫉妬するであろう端正な顔立ち。

人が、生物が、嫉妬を抱くことすらおこがましいほどに、七星十香は完成された美少女だった。

「服装は……着崩れてない。髪も……乱れてない。よし！」

「奇跡の子」と言われていようと十香は女の子だ。身だしなみは気にしてしまう。何より、十香にとってジブリールは母親と同時に天使として尊敬している人物なので、情

けない姿は見せたくなかった。

「十香ちゃんただいまー!」

身だしなみのチェックが終わったと同時に、玄関から元気の良い声がリビングまで聞こえてきた。十香はその声に聞き覚えがあった。というより、毎日聞いている声だ。

「あ、お母さんが帰ってきた!」

十香は尊敬する母親が帰ってきたことに笑顔を浮かべる。

そして、リビングの扉がバン! と強く開き、一人の美女が現れた。十香とジブリールの目があう。

その瞬間。ジブリールはその場から消えていた。

「え? お、お母さん……………きやつ!」

突然消えたジブリールに、困惑した十香だったがそれも刹那の間。どうやって移動したのか、背後に回っていたジブリールが十香の豊かな胸を揉みしだいていた。

「十香ちゃん、隙がありませんよ!」

「ひゃあつ! お、お母さん……………や、止めてよ……………」

「ごめんね? 十香ちゃんのおっぱいが気持ちよすぎて手が離れないの……………それどころかもっと堪能したくて加速しちゃうわ!」

ジブリールの動きが官能的に速さが増す。やられている十香はいつもの事なのだが、

この感覚にはいつまでたつてもなれない。

普通、ジブリールのように天使が邪な行動に出たり、邪心を持つていたなら、即座に天界に墮天警報が鳴り忠告してくるのはずなのだが……。

ジブリールの場合は、それが起きない。

本当に邪な感情なしで行っている事なのか？ それなら十香は恥ずかしくても母の好みにさせる。が、ジブリールに限ってそれはないだろう。

だつて——、

「うえへ、うえへへへ。十香ちゃんのおっぱい、形も弾力も最高！ その上で大きいとか反則もいいところよ」

うん。完全に邪な感情で動いている。

胸を揉みしだく指といい、それを眺める目といい。何故墮天しないのか不思議でならない。

「も、もう……！！ いい加減にして。そろそろ私だつて怒るよ？」

「えー、そんな事言つて。十香ちゃん一度も怒つた事ないじゃん」

「今日の今日は本気なんだからー」

頬を膨らませ、怒つていますよアピールするが、ジブリールには逆効果だった。

「ああん、十香ちゃんの膨れた顔も最高お！ もう、キスしちゃう！ んちゅうく」

「頼つぺたにキスしようとしなさいよ！　もう、お母さんは晩御飯抜き！」

十香はキスしようとするジブリールの顔を両手で押さえながら、我慢の限界を超え込んだ。

すると、いきなりドンと音を立ててジブリールが床に倒れた。

「そ、そんな……十香ちゃんのご飯が食べられないなんて……」

この世の終わり見たいな、絶望した表情でジブリールは呟く。その声は震えていた。

「お母さんなんて知らない」

そう言って去っていく十香の足に、ジブリールはしがみ付いた。

「ごめんなさい！　お母さんが悪かったわ。だから十香ちゃんのご飯抜きだけは勘弁して下さい！」

涙ながらに懇願するジブリール。どうやら反省はしているようだ。『今』だけが……。

このやり取りはもう何十回と繰り返してきた。そんなジブリールが今は反省してもどうせ直ぐにいつもの調子に戻る。

十香もそれはわかっているが、母親の泣き顔を見ると、心優しい十香は良心を揺さぶられ――

「……………今回だけだからね？」

「ありがとう、十香ちゃん!!」
結局許してしまうのだった。

2話 母

天界の中枢機関『ゼブル』。ここには、熾天使（セラフ）達が住んでいる。

それは勿論、熾天使であるジブリールも例外ではなく、その娘である七星十香も一緒に住んでいた。父親は教会の仕事関係で滅多に会うことはない。

そんなジブリール家の食卓には、いい香りを漂わせたお皿が二つ並べられていた。

お皿の中身はシチュー。忙しいジブリールに変わって毎日十香が料理を作っている。

「では、いただきます」

「いただきます」

十香とジブリールはいつもよりすこし遅めの夕食を開始する。

「ん、さすが十香ちゃん！ 何時もながら最高の料理だわ！」

「ありがとう。お母さんが喜んでくれると、作った甲斐があつたよ」

十香の作ったシチューを頬張りながら、絶賛する。それを聞いた十香はジブリールに喜んでもらえて良かったと、微笑む。

十香の微笑みをジブリールが見た瞬間。

ジブリールの綺麗に整った小さな鼻から、ツートと、血が流れてきた。

「ち、血?! お母さん、鼻から血が出てるよ!」

十香は慌ててティッシュを何枚かとり、ジブリールの血を拭いた。

十香はただただ心配そうに見つめるが、ジブリールからは十香が瞳を潤ませ、上目遣いで覗いているように見え、その可愛さのあまり、更に吹き出す血の量が増えていく。

十香自身は自覚していないことだが、十香の姿容は女神ですら逃げ出す美を持つている。その冗談としか思えない美貌に、上目遣いなどされたら、同性であろうとひとたまりも無いだろう。その証拠に、ジブリールの流血が更に激しさを増したのだから。

故に、ジブリールの流血が止まるのに時間を有したのは当然のことだった――

「ごちそうさま。ふう、十香ちゃんの作るご飯が美味しくて食べ過ぎちゃった」

「えへへ。これからも作るからたくさん食べてね。太らない程度に……ね」

「はい……と、そうだった。十香ちゃん、少しかけ時間いい? 真面目な話があるの」

鼻からの流血も止まり、シチューを食べ終えた十香は、ジブリールと話をするため、食事時と同じ向かい合わせに座った。

「話って何? 今日帰ってくるのが遅かったのと関係してるの?」

十香が聞くと、ジブリールは一つ頷き、肯定した。

「実は、ミカエルさまから………いいえ、私を含めた熾天使（セラフ）全員からの依頼なの」

「……っ!?!」

熾天使（セラフ）といえば、大昔から生き続ける伝説の天使たちだ。

そんな大物たち全員からのお願いとなると、驚きと共に、急激に緊張が身体を襲う。何を願いたいされるのか。セラフメンバーには今でも可愛がってもらっている十香は、あまりおかしな依頼は来ないと思っているが、それ相応のものだともわかっている。

十香はジブリールの言葉を待った。

「貴方には奪われたエクスカリバーの回収、もしくは破壊と、今人間界で暴れているコカビエルの討伐をお願いしたいの」

ジブリールの瞳は一寸のブレもなく十香の瞳を射抜いていた。

ジブリールがいかにも真剣なのか、それだけでわかる。

「コカビエル………」

正直に言つて不安だ。

古の戦いから生き残る墮天使の幹部。聖書にも記されたほどの大物が相手……。

逆に十香は、まだまだ生まれて十七年。古の戦いから生き残るコカビエルに比べた

ら、戦闘経験など皆無に等しい。

「大丈夫よ」

十香が顔を伏せていると、いつの間にかジブリールが後ろからおいかぶさる様に抱きしめた。

「……お母さん?」

「貴方なら大丈夫。なんたって、この私の娘なんだから」

親は親、子は子だ。親が出来るからといってその子供が出来るとは限らない。だが、そんな根拠の無い励ましでも、十香には十分だった。

「うん! 私、頑張るね!」

「ええ、頑張りなさい。詳しい話は明日、ミカエルさまが教えてくれるわ」

ジブリールはそう言うのと、十香から離れていく。少し名残惜しいが、それを言うときジブリールが調子づいて、また胸を揉まれるとうの変態行為が来るのは目に見えている。

話が終わると、十香はテーブルに置いてある空になったお皿をさげた。一度水で流し、洗剤で洗う。その動作は手馴れたもので、少しの無駄もなく流れるような動きだ。

お皿を洗い終わると、十香はお風呂に入る。その際、ジブリールも乱入してこようにしたが撃退した。いくら胸を揉まれていようと、裸を見せるのだけは危険だと十香の第六感がそう告げていた。

十香はお風呂から出ると、一緒に入れなくて落ち込んでいた困った母親を風呂場に押し込み、自室に戻った。

十香の部屋には、ベッドとダンス、机に本棚以外何も置いていなかった。

十七歳の女の子の部屋とは思えない。よく言えば整理整頓されていて綺麗、悪く言えば殺風景だ。

だが、十香は別段気にすることなくベッドに寝転んだ。時刻は夜の九時。寝るには少し早い気もするが、依頼の内容を考えると体調は万全の方がいい。

そう考えた十香は、早速寝ようと電気を消し、瞼を閉じようとして――

「十香ちゃああああん！ お母さんと一緒に寝ましようー！」

突然入ってきたジブリールが、十香の布団に潜り込んできたことにより、出来なかった。

隣を見ると、既に十香の毛布を半分被り、持ってきたであろう自分の枕に頭を沈めて、こちらを見ていた。一瞬の早業に、十香は呆れる。これでは追い出そうにも追い出せない。……でも、今日だけは一緒にいてくれた方が十香の心的には安心かもしれない。

母親の激励があつたとはいえ、不安が完全に払拭されたわけではない。いぎ、一人になると色々と考えてしまう。

……だから、今日だけは――

「あら、十香ちゃん？ どうしたの？」

いつもなら邪魔だと追い出すはずの十香が今回は何もしない。それを疑問に思ったのか、ジブリールは首を傾げた。

だが、十香はジブリールの質問に答えず、その代わりに半分空いている毛布に入り、もう半分を占領している母親の胸に顔を埋めるように抱きついた。

「と、とととととと十香ちゃんっ!？」

ジブリールが素っ頓狂な声を上げるが、十香は気にせず更に抱きしめる力を強めた。すると、ジブリールは興奮気味に歓喜の声を発していた。

「うえへ、えへへへ……十香ちゃんのたわわなおっぱいが私のお腹にいく」

十香はジブリールの胸に顔を埋めているため、母親の顔を見ることはできないが、きつとだらしな顔になっている様子が目に浮かぶ。

だがその態度も、十香の言葉とともに消え失せる。

「一人だと色々と考えちゃって不安になっちゃうから、今日だけ、今日だけでいいから一緒に寝て……」

十香の身体は少し、密着していないと気づかない程度だが、確実に震えていた。

実力ではコカビエルを優に超えていたとしても、心……精神はまだ子供。十七歳の女の子なのだ。

しがみつくように抱きついていた十香の背中に、ジブリールの腕がそっと回された。「今日だけと言わず、寝て欲しかったらいつでも寝てあげるわよ」

そう言うジブリールの声音はとても優しくかった。聞いているだけで安心する。それに、母親に抱きしめられると、不安で揺れていた心が安定し、安心する。

「ありがとう、お母さん」

「貴方はまだ子供なんだから、怖かったり不安に思ったりしたら遠慮なく私に甘えていいのよ？ 何て言っただって、私は十香ちゃんのお母さんなんだから！」

「うんー」

これでもう大丈夫だ。震えはいつの間にか治っていた。

十香は最後に強くジブリールに抱きつくつと、瞼を閉じ、そのまま眠りについた。

眠った十香は、安心しきった表情をしていたー

☆☆☆☆

十香は目を覚ますと、ジブリールの腕の中にいた。昨日のことを思い出した十香は、甘えてしまったことが恥ずかしくて、頬を赤らめた。

(で、でも。甘えていいって言ってたし……だから別に今甘えても、いいよね?)

しかし、いくら甘えていいと言われても、堂々となんてやはり恥ずかしくてできない。だから、まだ眠っている今がチャンスだ。

十香は起こさないよう気をつけて甘える。

元々抱きしめられていたため密着はしていたのだが、十香は更にくつつき、頬ずりをする。

ジブリールの肌はミルクのように白く、きめ細かくてすべすべと気持ち良かった。

「んん〜。お母さん……………大好き……………」

全身で、母に甘えていた十香は、無意識のうちに眩いていた。

「やっぱりお母さんに抱きしめてもらうと安心するなあ……………」

恥ずかしいとか、そういった感情は既に消えていた十香は、普段絶対に見せないであろうリラックスしきっていた。

……………ジブリールが起きていたとも知らずに……………。

「お母さん……………大好き」

「私も大好きよ」

「……………え？」

十香はリラックスしきった状態から一変。身体が硬直したように動かなくなった。

きつと気のせいだ。いや、気のせいであってほしい。十香は冷や汗を流しながらも、

徐々に顔を離していく。

そこには眠っているジブリールの姿が――

「おはよう、十香ちゃん♡」

「お、おはよう……」

そこには顔を赤くしつつも、満面の笑顔を浮かべたジブリールの姿があった。

それを見た瞬間。十香はまずいと思った。このままでは自分は母に揉みくちやにされてしまうと。

照れたのであろう母の表情は、それは形容のしようがない程美しかったが、それを感じ取り観賞している暇はなかった。いち早くジブリールの腕の中から脱出しなくては……っ！

起きたばかりで寝ぼけている今なら多少荒くとも抜け出せるかもしれない。

だが、その考えは甘かった。甘過ぎた。

相手は熾天使（セラフ）……それ以前に母親なのだ。逃げれる可能性など初めからなかった。

「ああんっ、十香ちゃん私も大好きよっ!! 心の底から愛しているわ!」

「むぐっ……」

「まさか十香ちゃんから大好きって言われるなんて……幸せえ」

ジブリールが心の底から喜んでる様子を見ると、たまになら言ってもいいかな……と、十香は思った。

暫くはジブリールの好きな様にさせようと、十香は身を委ねた——

月光校庭のエクスカリバー

3話 舞い降りる《天使》

結局あの後、十香は揉みくちやにされた。委ねたのは十香なのだから文句は無いのだが、まさかあれから昼までやられようとは思ってもみなかった。

今日はまだ布団の中にしかいなかったはずなのに、十香はどつと疲れが溜まった。

逆にジブリールはいつも以上に生き生きとしている。

「十香ちゃん、今日はミカエルさまの説明を聞いたらそのまま人間界に送るから、それまでに準備しておいてね」

「え？ 今日話を聞くだけじゃなかったの？」

「本当ならそのつもりだったんだけど、どうやらコカビエルが今夜動くそうなの。だから説明の後、急だけど人間界に直行して欲しいの」

「ごめんねと謝るジブリールに、十香は平気だよと返す。本来悪いのはコカビエルの方なのだから、ジブリールが謝る必要は無い。」

確かに急だが、夜までにはまだ時間があるし、何よりジブリールのおかげで、もう心

の準備はできています。もし、今すぐに行ってくれと頼まれても大丈夫だろう。

それ程までに、十香の精神は安定していた。

それでもと謝る母親に、十香は言った。

「なら、夜までずっと一緒にいてくれたら許してあげる」

「喜んでー！」

先ほどまで済まなそうにしていたジブリールとは一転、ハイテンションに切り替わる。

（もしかしてお母さん。私がこう言うようにわざと……）

ジブリールなら十分あり得る……が、今回は別にいいか。

昼食は既に済ませてあるので、早速十香はジブリールへと寄っていく。そして、ジブリールの太ももに頭を乗せた。

膝枕だ。

まさかの行動に、ジブリールは奇声を上げたが十香は気にせず柔らかくもつちりした太ももを堪能する。

（もつちりと柔らかいのお肌すべすべで気持ち良い……。こんな眠くなっちゃうよお）

膝枕早々、十香はその気持ちよさに眠気に襲われる。まだ起きて、この感触を味わい

たかった十香は抵抗するが、その途中で頭を撫でられる感覚がした。

「寝てても大丈夫よ。時間になったら私が起こしてあげるから」

割れ物を扱うようにそつと撫でるジブリールの手が少しくすぐつたくて、でもそれ以上には気持ちよくて……。

自然と瞼が閉じて行く。

(まだ寝たく無い。けど……頭まで撫でられたら……)

瞼が完全に閉じて少しすると、十香は眠りについた。

☆☆☆☆

日が暮れ、夜が訪れる。

ジブリールに起こしてもらった十香は、四大熾天使であり、天使長でもあるミカエルに、話を聞きに行っていた。

「来ましたね」

天界の第六天にある中枢機関『ゼブル』。そこには既に、ミカエルが待っていた。

「遅くなってごめんさい、ミカエルさん」

地に降り立った十香は、先にいたミカエルに謝る。天使たちは皆、例外なくミカエルさまと呼ぶのだが、十香の場合子供頃の頃から遊んでもらっていた頃からの呼び方なので、それが身についていた。

ミカエルも嬉しそうなので問題はない。

「いいですよ。私も今来たところですから」

そう言つてミカエルは十香の頭を撫でた。

母親とは違うがまた別の気持ちよさがあった。

「それで、ミカエルさん。話つて何ですか?」

「実は、話なんてものはありません」

「え?」

「ジブリールには話があると言いましたが、実際は行く前にあなたの顔を見ておきたかったのですよ」

爽やかな笑顔を浮かべるミカエル。本当にただ顔が見ただけのようだ。

「十香、あなたは天界の宝です。《天使》に選ばれたこともそうですが、それ以上にいつも笑顔な姿が、天界全土に癒しを与えているのです」

「私が……………癒しを?」

まったく自覚のない十香はどう反応すればいいか困った。ただ楽しいから、嬉しいから笑つていただけなのに、それが結果的に天界に癒しを与えているなんて誰が想像できようか。

「ええ。十香は知らなくて当然ですが、我々は悪魔と墮天使との戦争の処理で疲弊して

いました。それが終わってもまだ悪魔と墮天使とは冷戦状態、休む暇もなく、我々は疲弊していく一方でした」

その話はジブリールから聞いたことがある。十香が生まれる前までは天界中が殺気立っていたと。

「ですが、あなたが誕生してから天界は変わりました。赤ちゃんなど縁のないものが生まれ、その愛くるしさに日々の疲れは吹っ飛ばされるようでした。それは私だけでなく天界に住まう天使全員がです。そして、日々成長していく十香に癒されていき、そして今ではここにも笑顔が戻りました」

「……………」

まさか自分の生まれがそんな劇的な変化を天界に与えていたなんて思いもしなかった十香は、唾然とした。

そんな十香の頭をまたミカエルは撫でるが、十香は反応できずにいた。

「十香。あなたは天界にとつて必要不可欠な特別な存在なのです。……………だから、無事に帰って来てください」

ミカエルの手が離れる。そこでやっと十香は反応を示した。

余計な言葉はなく、一言の意思表示を――

「はいー」

「よろしい。では、今から人間界に送りますが準備はいいですか？」

ミカエルの最終確認に十香はうんと、頷く。

そして周りを見れば、何人かの天使たちが十香たちを取り囲んでいた。

十香が疑問に思っていると、ミカエルが答えた。

「彼らが天界と人間界を繋ぐ門を作ってくれる者たちです。すぐに完成するでしょうから私たちは少しだけズレて待っていきましょう」

十香はミカエルについて行くように脇にそれる。

すると、天使たちが詠唱を始めた。聞いた限り聖書の一節に違いない。

「十香、転移先は今回向かう駒王学園の近くにある教会です。直接学園に送ってもいいのですが、それだと天界が介入してきたと誤解を招いてしまいますから」

「わかりました」

ミカエルと話していると、ちょうど両開きの門が現れた。白亜で出来ていそうな見事な門構えだ。扉が音立てて開いていく。

「さあ、この門の先は人間界です。全てが終わり次第、教会に戻ってください。確認次第こちらから門を開きます」

「はい……それでミカエルさん、その……」

「どうしました？ ……………ああ、そういう事ですか。大丈夫ですよ、もう来てますか

ら

ほらと、ミカエルが横に避けると、そこから十香が行く前に会いたかった人物が飛び込んできた。

「お母さん！」

驚きと歓喜が入り混じった声で、飛び込んでくる母親のジブリールを受け止めた。

ジブリールの顔が豊かな胸に埋もれて、くすぐりたい。でも、今はそれが心地が良かった。

出発前にいつものジブリールが見れるだけで、元気が溢れ出てくる。

「十香ちゃん。無事に、怪我一つなく帰って来てね」

胸から顔を離れたジブリールが真剣な眼差しで十香の瞳を除く。その雰囲気は普段のジブリールからは想像もできないくらい、引き締まったものだった。

だが、十香は何度かこのジブリールを見た事があり、こういう時はどうすれば一番効果的かわかっていた。

「安心して、お母さん。私には主の加護があるから大丈夫。必ず無事に帰ってくるから」

主の加護とは、十香が生まれ持った《天使》のことだ。

神々を屠る事のできる《天使》が、たかだか墮天使程度に通用しないなんて事はありえない。

だから大丈夫と、十香はジブリールを強く抱きしめる。

「もう時間だから……………行つてきます」

「…………ええ、行つてらっしゃい」

名残惜しいが、十香は離れる。

最後にジブリールと一言の交わり、そして白く光る門の中へと歩き、そして消えていった。

☆☆☆☆

人間界では、既にコカビエルが動いていた。

教会から送られた紫藤イリナはコカビエルの根城で返り討ちに遭い、聖剣を奪われた。

そして、コカビエルは紫藤イリナをこの町一帯を管理しているリアス・グレモリーと、その下僕である兵藤一誠とアーシア・アルジェントに投げ捨て、宣戦布告を行った。

二天龍の片割れ赤龍帝ドライブの所有者である兵藤一誠を筆頭に駒王学園に向かうが、そこにはこの町を簡単に崩壊させられる準備が既に始まっており、同時に四本のエクスカリバーを一つにする儀式も始まっていた。

止めようと動く兵藤一誠たちの前に、地獄の番犬の異名を持つケルベロスが現れる。

無事、倒す事はできたが、さらに追加でもう一匹現れた。途中で加勢に来たゼノヴィイ

アと、赤龍帝の能力である力の譲渡で強化されたりアス・グレモリーと姫島朱乃によって消滅した。

一本になったエクスカリバーをデュランダルを解放したゼノヴィアと、禁手（バランズブレイカー）に至った木場裕斗により破壊され、エクスカリバーを扱っていたフリード・セルゼンは切り捨てられた。

そこで漸く腰を上げたコカビエルと戦闘になるも、一誠たちでは手も足も出さず苦戦する一方。さらには、聖書の神の死をも告げ、神を崇拜していたアーシアはその真実に絶してしまい、ゼノヴィアは一時戦闘を行えないまでに動揺したのだった。

☆☆☆☆☆

神の死を暴露し、嬉々としているコカビエルは顔を邪悪に歪め、更に言い放つ。

「これからそう遠くない日に、俺の求める戦争をはるかに凌駕する出来事が必ず起きるだろう。歴史の終わりか、それとも転換点か……証拠に《天使》が所有者を選んだのだからな！」

何のことなのかさっぱり分からなかった一誠は隣にいるオカルト研究部の部長であり、キングのリアス・グレモリーに聞いた。

「部長、《天使》ってなんですか？ 天使は天使じゃないんですか？」

一誠は最近悪魔になったばかりで、こつち側のことはあまり詳しくなかった。それを

わかっていたリアスは一誠に説明する。

「《天使》というのはイツセーのもつ神器のようなものよ。人間にしか扱えない代物。でもその《天使》というのは十三種の神滅具を遥かに超えた力を持つものなの」

「神滅具（ロンギヌス）を超える!?! そんなのが本当にあるんですか!?!」

一誠はあまりの衝撃に絶句した。何せ、一誠の持つ神器はその神滅具の一つなのだ。その力は強大で、すべてを解放すると神すらも倒すことができると言われていた。まだ一誠は神滅具を使いこなせてはいないが、それでも《赤龍帝の籠手》ブーステッドギアが強力である事は理解している。その驚きは他人とは比べ物にならない。

一誠の驚愕の声に応えたのはコカビエルだった。

「実在する。そして神滅具を凌駕するのも本当のことだ。何せ、聖書の神が何千年とかけて仕上げたものだからな。力を全て解放して漸く神を殺せるロンギヌスに対して、《天使》は素の状態で神を容易く屠る力を有している。……………今はどこのどいつが担い手に選ばれたかまだ分かってはいないようだがな」

少し落胆した様子を見せるコカビエル。様子から見るとどうやら戦いたいらしい。

一誠は呆れる。神を簡単に殺すことのできる相手と戦いだなんて、狂つてると。だがこれは、戦闘狂であるコカビエルに言っても無意味なことだろう。

そんな一誠の様子も君することなくコカビエルは続ける。

「俺が今回動くことにしたのはその《天使》の担い手を呼ぶためのものでもある。現れないなら俺が世界を崩壊させるような争いを起こして引きずり出してやるってなっ！」

高々に言うコカビエルに、一誠は我慢できずに叫んだ。

「お前の勝手な都合で俺たちの平和を壊そうとしてんじやねえぞ！」

「ふん、下級悪魔風情がよく吠える。ならば守ってみせろ！ 貴様はかりにも今代の赤龍帝なのだろう？」

ニヤリときみ悪く笑うコカビエルに、一誠は拳を強く握っていた。

赤龍帝と言われても、一誠の場合は歴代最弱だ。満足に力を引き出すことができない。そんな状態では聖書に記された怪物には倒すはおろかかすり傷すら負わせられない。

いくら神滅具を持っていようと、所有者である自身が未熟であれば意味がないのだ。一誠はそれが悔しくて歯噛みする。

「赤龍帝といつても、所有者がこのザマでは所詮その程度だな」

侮蔑の視線で見下すコカビエルに、一誠は戦いが始まる前に、相棒のドライグが言っていたことを思い出した。

『いざとなったら、俺がおまえの体の大半をドラゴンにしても打倒してやるさ。倒せないまでも一時間動けないぐらいのダメージは残してやる』

(もう、これしかないッ！ あいつを倒さないと母さんや父さん、松田や元浜たちがみんな死んじゃう！)

「ドライグ！ さっき言ってたこと本当なんだな？」

『本気か、相棒？』

一誠の左手にある《赤龍帝の籠手》から渋い音声が発せられる。

「ああ！ そうでもしないとあいつは倒せねえ！」

『そうか……だがな、相棒。その必要はないかもしれないぞ』

「は？ 何言ってるんだよドライグ。それ以外に勝つ方法なんて……ッ!?」

ゾクッ！ 一誠の体に強烈な悪寒が走った。

『気づいたか、相棒』

周りを見れば、コカビエルも含めた全員が固まっていた。恐らく一誠と同じように悪寒を感じたのだろう。

強烈な聖なるオーラが、結界内の駒王学園中に広まっていた。悪魔にとつて光、すなわち聖とは毒そのもの。肌が焼けるような感覚には覚えがあった。

「これは、エクスカリバーを前にした時と同じ……」

オーラだけど、

「この聖なるオーラ……エクスカリバーのときの比じゃないわ！」

リアスが両腕を抱きながらありえないと叫ぶ。

そう、エクスカリバーのレベルではない。例えるなら、エクスカリバーは火だが、この聖なるオーラはマグマだ。比べることすら無駄なこと。

誰もが恐れる中、一人だけ笑っているものがいた。

「ハハハハ！ ミカエルもやつと本腰を入れたか？ こんなオーラを発した天使をよこすとは！ 間違いなく熾天使（セラフ）級っ！ 誰だ？ ラファエルか？ ウリエルか？ サンドルフオンか？ 誰でもいい、早く俺の元へ来やがれ！」

（セラフ級!? セラフって言ったらー）

『天使の中でも最上級な奴らだ。その中でもさらに強力なのが四大熾天使と呼ばれる者たちだ。悪魔で例えるなら四大魔王と一緒にだな』

（魔王様と同じ!? でも、それならこのオーラは領けるぜ……）

一誠は冷や汗を流しながらそう思うが、ドライグが違うと指摘してきた。

『これは四大熾天使のものではない。俺も昔に戦った事はあるからわかるが違う。ーだが、このオーラ……奴に……まさか』

ドライグはそれつきり黙ってしまった。

相棒の様子には気がかりだったが、それよりもこのオーラの主のほうが気になった。

極大な聖のオーラが近づいてきているのがわかる。それに連れて一誠の身体が拒絶

反応を起こすように震える。いや、この震えは生命の危機に対する警報に近い。

「ぶ、部長……このオーラやばくないですか？」

リアスに言う一誠の声ははつきりとわかるくらい震えていた。そして、一誠の言葉はコカビエルを除いた全員の意見を代弁したものであり、皆がリアスの指示を待っていた。

「みんな、戦闘態勢はといちやダメよ。一瞬も気を緩めちやダメ。もし、相手に敵対心があればいつ攻撃が来るかわからないのだから」

リアスの指示は現状維持だった。だが、それに反対するものもなく自分たちの主を信じてただ従う。一誠も例外なく、リアスを守るように《赤龍帝の籠手》を構えた。

そして——

『oooooooooooo!!?!?』

この場にいる全員が硬直した。そして、その全員はある一点を見つめていた——いや、見惚れていた。

何故ならそこには、冗談と思えるほど、美しい美少女が奇妙な光のドレスを纏って立っていたからだ。

不思議な素材で構成されたドレスも目を引いた。そこから広がった光のスカートも、気を失うほど綺麗だった。しかし、彼女自身の姿容は、それすらも脇役に霞ませる。肩

に腰に太ももに絡みつくような長い闇色の髪。

そして何より誰もが目を奪われたのは、女神さえ嫉妬を覚えさせるであろう端正な顔だった。

視線を、心を一瞬にして奪い去られた。尋常でなく、暴力的なまでに美しい。

その姿に、誰もが動く事はおろか口を開くことができず、時間が止まったと錯覚してしまう。

あまりの美貌に畏怖さえ抱かせる少女は一誠たちとココビエルを一瞥してからゆつくりと口を開き、言った。

「ぎゃあぎゃああと煩いですね。ま、それが堕ちたカラスとコウモリなら納得できるかな」まさかの両者に罵倒を浴びせる言葉に、違う意味で場が凍った。

見た目のギャップに誰もが付いていけなかったのだ。

ただ、目の前の美少女は凍った空気など知らんとばかりに、太陽より眩しい微笑みを浮かべていた――。

4話 怒り

詠唱で開かれた人間界につながる門を潜った十香は、気がつけば教会内に立っていた。

降り立った教会は、戦闘でも起こったのか、ボロボロだった。綺麗に並べられているはずの長い椅子は半分に折れたり、バラバラにひっくり返っていた。壁には刃物や銃撃の跡が無数に残っており、それなりの戦闘が起こっていたことを述べていた。

「ここは教会と呼べるのかな？ 廃墟の方が合ってるような……」

実際、もう誰もこの教会を活用しているものはいない。荒れ放題な所を見ればそれは一目瞭然だ。天使としては見過ごせない惨状に、十香は片付けようとしたのだが、あいにくと今はそんな時間はない。

ミカエルを含む熾天使（セラフ）から『グリゴリ』の幹部、コカビエルを止めて欲しいと依頼を受けている最中だからだ。

十香は室内を一瞥してから、後ろ髪敷かれる思いで教会を出た。

「あ、そう言えばこの格好じゃ戦えないね」

十香は自身の服装を見て、言う。

薄手のチエニツクにショートパンツという組み合わせ。十香には詭えたように似合っていた。半分人間の血が混じっている十香は、服装からして人と同じものになっている。が、今回に限っては明らかに相応しくない服装だ。ふざけていると言われても仕方がない。

戦闘には不向き過ぎる。今から天界に戻る事はできないし、そんな時間もない。既にコカビエルは動いているのだから。

それを理解している十香は帰るといふ選択肢は選ばない……と言うより、そもそも選択肢にすらない。

十香はその場で立ち止まり、集中するように瞼を閉じた。

「――〈神域霊装・十番〉アドナイ・メレクー」

十香がその名を呼ぶ。

瞬間、世界が啼いた。

周囲の光景がぐにやりと歪み、十香の身体に絡みついて、荘厳なドレスが形を取る。肩に、胸に、腰に、身体の各所を鎧う紫紺の甲冑に、淡い輝きを放つ光のスカート。そこには見るものを釘付けにさせる絶対的な美を体現した少女がそこにいた。

「よし、これなら大丈夫！」

これが十香の戦闘を行う際に身につけることが多い装い。この不思議なドレスは、霊装といい、十香を絶対を守る最強の盾であり、城だ。

そして、十香は地面に踵を突き立てながら言う。

「〈塵殺公〉サングルドフォン！」

瞬間、そこから巨大な剣が収められた玉座が出現する。十香はトン、と地を蹴ると、玉座の肘掛けに足をかけ、背もたれから剣を引き抜いた。それは幅広の刃を持った巨大な剣だった。

虹のような、星のような幻想的な輝きを放つ不思議な刃。

その剣は尋常じゃない聖なるオーラを発していた。その輝きは聖剣エクスカリバーをも霞ませるほど。

それもそのはず、〈塵殺公〉は聖書の神が何千年とかけて完成させた《天使》の一つだ。幾ら最強の聖剣と言われていようと〈塵殺公〉とは比べるまでもなく劣る。

そしてこの〈塵殺公〉が十香の最強の矛だ。

最強の盾に最強の矛。

両方を兼ね備えた十香は、目的地である駒王学園へと駆けた。

結界が大きく何かを覆うように貼られている。何かは間違いなく駒王学園だろう。恐らく被害を抑えるために貼っているのだろう。

しかし、コカビエル相手にあの程度の結界ではないのと同じだ。

十香は尋常ではないスピードで移動している。その速度は人の目で追えないほど。半分が天使なため、身体能力が別格に高いため出せる速度だ。

恐ろしく早いのに、物音が一つもしない。

「見えた」

学園の正門らしき場所に複数の悪魔が結界を貼っているのを十香の視界に入った。

一度止まって話を聞こうかと考えたが、外側いでは中のことなど分かるはずもない。聞くだけ時間の無駄だ。

そのまま強引に結界内に入ると決めた。ちょうどその時になって、結界を張っていた悪魔たちが十香に気づいた。

「っ!? その貴方、止まりなさい!」

眼鏡をかけた女性悪魔が水を魔力を作りながら静止の声をかけてくる。が、気づくのが遅すぎた。

十香は〈塵殺公〉の切っ先を正面に向け、走る足を強く踏み込み、地面を蹴る。

十香の身体が少し浮き、弾丸の如く加速して悪魔たちを一瞬で追い抜き、結界の一部を破壊し侵入に成功する。

眼鏡の女性悪魔とすれ違う瞬間、十香はごめんなさいと謝罪した。

「え……う？」

一瞬の事に、彼女は目を白黒させていたが、既に十香は学園内に入り、いなかった。

☆☆☆☆

結界内に入った十香は、力が集まっているグラウンドへ向かって歩いていく。

グラウンドに近づくとつれて、コカビエルと悪魔たちが言い合いをしているのが聞こえてくる。

平和を望む悪魔たちの話は十香は納得できた。争わなくて済むならそれが一番だから。逆にコカビエルの戦争を始めたいという話には納得はできなかった。誰が好き好んで戦争なんて始めるのか。それはコカビエルのような戦闘狂だけだろう。ましてや天使である十香が戦争などを望むわけもない。

けど、悪魔が平和を謳ったって胡散臭い……それは堕天使にも言えることだが。

グラウンドが見えた。そこには空中で静止するコカビエルと、対峙する悪魔六人と、教会の使徒であろう人間が一人いた。

しかし、予想外のことにその全員が十香を見ていたのだから、驚いてそこで足を止めてしまった。

(そ、そんな一斉に見られたら恥ずかしいよ……)

警戒して睨みつけているなら驚くこともなかったのだが、全員が棒立ちの状態で見つめるのではなく見つめてきたのだから恥ずかしくなってしまうのも仕方がない。

(え、えつと……何か言わないと)

誰も何も話さず、十香は見つめられ続けていることがとてつもなく恥ずかしくて、何か話そうと言葉を探る。

(初めてだからやっぱ挨拶？ ううん。今はそんな空気じゃない。なら今すぐに隠れて出る機会をうかがう？ つて、もう姿見せちゃってるんだから意味ないよ！
ううう、どうしよう……)

隙を見せないよう表情や態度には一切出さないが、内心は焦りに焦っていた。

目に見えた動揺や焦りは大きな隙になるから気をつけなさい。母親のジブリールによく言われていたことだ。その教えがあつたから、十香は焦る気持ちを表に出さずに抑えることができた。

——お母さん、ありがとう！

心の中でジブリールに感謝していると、ふと、十香はある事を思い出した。

それは、この任務が始まる数日前に教えられた言葉だ。

——確か……。

『いい？ もし駒王なんちゃらつて所で悪魔と墮天使がいて、戦闘もしくは何やら言い

合いをしていたらこう言いなさい』

「……確か………こう………」

「ぎやあぎやあと煩いですね。ま、それが墮ちたカラスとコウモリなら納得できるかな」

堂々と放たれた、瞬間。

空気が凍った。

だが、十香は母親に教えられたことを生かすことができ、満足して、空気が凍ったことにまるで気づかない。

だが、真つ先に我に返ったコカビエルによって凍った空気は霧散する。

「………これほどの神聖を持つ者がまさかこんな小娘だとはな、ガツカリだ」

コカビエルからありありと落胆、失望感が見て取れる。神聖の高さは驚愕に値するが、それを使役するものが小娘だと知ると、コカビエルは一瞬で興味を失った。

「消え失せろ小娘。そして協会を通じてミカエルに伝えろ。もっとマシな奴をよこせ。最低でも熾天使級をつれてこいとな！」

そう言うや否や、コカビエルは追い払うように光の槍を十香に放った。

悪魔が受ければ致命傷は免れない。下級、中級悪魔ならば一瞬で消滅するであろう光の槍が一直線に十香へと迫る。

「その子、危ない！」

コカビエルの強さを経験した兵藤一誠が叫ぶが、十香は避けるそぶりを見せない。何故なら、避ける必要がないからだ。

光の槍が十香を貫こうとした瞬間。

ガシツと、光の槍を掴んだ。

「な、なに!?!」

コカビエルが驚きの声を上げる。

手を抜いていたとは言え、墮天使の幹部にして聖書にすら記された自身の攻撃を、小娘とバカにした十香に、容易く受け止められるとは想像もしていなかっただろう。

しかし、霊装を纏った十香には簡単に掴めてしまう。十香は、掴んだままの光の槍を軽く握りつぶした。

そして、空に飛んでいるコカビエルを見上げる。

「私は出来れば誰とも争いたくない。コカビエル、ここは引いて。貴方さえ手を引いてくれたら、全て収まるの!」

「……ハッ、なにを言うかと思えば、争いたくないだと? 考えが甘すぎる! いや、それ以前に、その口ぶりではお前が俺と争えるレベルに達していると聞こえるぞ? 勘違いするなよ小娘。さっきの攻撃は威嚇目的で放ったものだ! あの程度を防いだぐらいで調子に乗るなッ!」

コカビエルが両手を上げ、力を貯めていく。先ほどよりも遙かに威力の上があった光槍。

事の成り行きを見ていた一誠たちは、さつきまで戦っていたコカビエルが、全く本気じゃなかったことに気づく。あまりの力の差に絶望すら覚えた一誠たちだが、十香はそれでもコカビエルを見上げるだけで避けようとはしない。

「その余裕な態度……あの時の、忌々しいあの女を思い出す」

「あの女？」

思わず聞き返してしまった十香の質問に、コカビエルは吐き捨てるように言う。

「熾天使の一人……殺戮天使とまで言われたジブリールだ！ あの女……昔も今のお前と全く同じように余裕な態度をしてやがった！ 忌々しい、今度会ったらただじゃすまねえ！ 犯して犯して犯し尽くしてから、ぶち殺してやるっ!!」

「……………」

コカビエルの怒りがそこにはあった。しかし、それを聞いた瞬間。十香の思考が一瞬だが停止した。今コカビエルが言ったことをすぐに頭で理解できなかったのだ。

「……今、この男はなんと言った？」

「……ジブリール……私のお母さんを殺す？」

「……私のお母さんをあの堕ちた醜い堕天使が犯す？」

——あの堕ちたカラス風情が、お母さんに触れるは愚か犯し尽くす？

——……………。

「だが、まずはお前からだ、小娘えええ！ お前も大人しくさせてから犯して辱めて、教会にお前の死体を晒してやる。それ程の神聖を放つからにはお前を鼻屑にしている天使が必ずいる！ まずはそいつから引きずり出してやる！」

怒りの形相を浮かべたコカビエルが、両手を十香に向かって振り下ろした。すると、巨大な光の槍が十香に向いたかと思うと、高速で放たれた。

迷いなく十香を穿たんとする迫る光の槍。だが、十香は俯いたまま動く気配がない。既に槍は回避不可能な位置にまで達していた。仮に防御が間に合ったとしても、ダメージは確実に通る。その後ゆっくり飄つてから……と、考えていたコカビエルの顔がニイと歪む。

ムカついた小娘とはいえ、これほどの美貌。堕ちた墮天使には最高の獲物だった。

しかし、光の槍が十香を貫こうとした瞬間――。

「許さない―――」〈塵殺公〉

その言葉と同時に十香は〈塵殺公〉を握っていた右腕を振り上げた。

刹那――。

巨大な光の槍は跡形もなく切り刻まれ、その余波が上空にいるコカビエルまで伸びていき、

「ぐっ、がああああああつ！ 俺の、俺の腕がああああああー！」

何の抵抗もなくコカビエルの左腕を切断した。更に言えば、後ろの五枚の翼も、半分から先は無くなっていた。

「き、木場……あの子、いま、何をしたかわかるか……う？」

「……わからない、僕でも何も見えなかった……」

自分たちがどう足掻いても倒すことができなかったコカビエルを斬った十香に唾然とする一誠たち。

「許さない……汚れたカラスが、私が一番尊敬している天使に触れるなんて。身の程を

知りなさい。あの人はお前ごときが触れていい人ではない」

尊敬し、愛している母親を辱めるといったコカビエルに十香は態度を一変させた。来た頃は、まだどこか緩かった十香の雰囲気は、瞬時に刃物のように冷たく、そして鋭いものへと変わっていく。

コカビエルは触れてしまったのだ。

《天使》という絶大な力を持った十香の、怒りに――――。

5話 v s コカビエル

十香の瞳にははつきりと敵意、殺意が漏れ出していた。

殺気を向けられたコカビエルは一瞬、押されたが直後にある事に気がついた。

「……っ!? この全てを殺すかのような濃密な殺気………あの女と同じ……っ！」

あの女……ジブリアルと殺気が酷似していると感じたコカビエルは十香を睨みつける。

十香の殺気がジブリアルと酷似している……それは当然だ。何と言っても十香はジブリアルの娘。全勢力から殺戮天使と畏怖された存在の血縁者なのだから。

だからここでコカビエルは止めておくべきだった。例え一瞬だとしても、ジブリアルに近い何かを感じたその瞬間から逃げるべきだった。

だが、彼の墮天使幹部としてのプライドと、腕を斬られた怒りで選択を誤ってしまった。

「奴と似た殺気といい俺の腕を斬り飛ばした事といい、貴様は余程俺に殺されたいよう

だな！」

翼が斬られたことで満足に飛ぶことが出来なくなったコカビエルは、地上に降りると、全ての膂力を駆使し迫り来る。光の剣を作り出したコカビエルが、腕が複数にぶれて見える速さで斬りかかってくる。

速さと腕力を乗せた重い一撃。それを十香は〈塵殺公〉を振るだけで対処した。

光の剣と〈塵殺公〉がぶつかり合った瞬間、コカビエルの剣は跡形もなく粉碎された。

「なにー!?」

「その程度の剣、何本あろうが脅威に感じないわ」

「クソツッ！ ふざけるな！」

コカビエルは切断された左腕を十香に向けて振った。傷口から流れ出る血が、十香の視界を遮るように飛び散る。

「……汚い」

飛び散る血を見てそう呟いた十香は、後ろにバックして避ける。

避けている間に追撃してこなかったコカビエルを、十香は不審に思い見てみると、空に片腕を掲げていた奴の姿が見えた。

「ハハハ！ あの剣が何本あつても脅威でないと言ったな。なら、それ以上のものが何百本も “一斉” に来たらどうだ？」

「少し強化されたところでもないも変わらない」

「ハハハハ！ なら受けてみる、小娘！」

コカビエルの高笑いと同時に、十香の頭上に大きな魔法陣が展開される。そしてそこから、無数の光の槍や剣が雨のように降り注ぐ。

いや、雨のようではない。これはまさしく剣と槍の雨だ。どこにも避ける空間も、隠れる場所すらない激しい雨。一本で上級悪魔ですら簡単に殺すことができるであろう強力な光の剣や槍が、豪雨のように十香を襲う。

その技を見て十香は思った。

（確かに、攻撃一つ一つの威力は上がっている）

だが、言わせて貰えばそれだけ。力技のゴリ押し。罨のような絡め手が一切ない。十香のことを知らないとはいえ、何と浅い考えか。

十香の纏う霊装は絶対の盾。堅牢な防御力を誇る霊装の前では、あらゆる攻撃はダメージを通さない。

（「こんな中途半端な威力の技」で、本当に私を倒せると思ってるの？ ねえ、コカビエル？）

そう、心の中で問いかける。無論、返事など返ってくるわけではない。

ーもし、そう思っているなら、その認識を改めさせてあげる……。

「フツ！」

十香は〈塵殺公〉を頭上へと振り上げる。

すると、降り注ぐ槍や剣、そしてそれを降らせている魔法陣を刃の軌跡が通り抜け、学園を覆っていた結界ごと粉碎した。

「結界が………つ！ ソーナ！」

壊われた結界を呆然と見ていたリアス・グレモリーが、急に焦った様子でそう叫ぶ。

十香はソーナという人物に心当たりがあった。恐らく、結界に入ろうとしたとき止めに入った悪魔のことだろう。

（そう言えば、その人には悪いことしかしてない、私。勝手に結界の一部を破って侵入しただけじゃなくて今度は結界そのものを破壊しちゃった。いつかまた謝らないとね）

「ソーナ……あの外にいた悪魔たちなら無事ですよ」

少し罪滅ぼしのつもりで、彼女の無事を伝える。

「え？ ……そう、なの？」

急に声をかけられたリアスは緊張した様子だったが、友の無事を聞くと恐る恐るといった風に確認してきた。

「はい。少し加減を間違えて結界を破壊してしまいましたけど、外の悪魔たちには何の影響もありません。あるとしたら、急に結界が壊されたことで驚いた、くらいのものの

十香は先ほどのように右腕ごと翼を切断しようと〈塵殺公〉を構える。それをみたコカビエルの、顔がニイと笑う。

「甘いわ！ 同じ手が通用すると思うな！」

黒い翼が鋭い刃物と化し、四方八方から十香を猛撃する。これはリアスの眷属、搭城子猫が戦車の駒の特性である防御力を持つてしても防げず、切り刻まれたもの。威力は確かだ。

しかし、

「あなたの方が甘い！」

十香はその全ての翼をさばき、斬り裂いた。

「ガアアアアア！ おのれ、おのれええええ！ 俺の翼を、よくもおおお！」

翼のなくなったコカビエルは、そう叫びながら落ちていく。落ちていくコカビエルを見ながら、〈塵殺公〉を天を突くように掲げる。

すると〈塵殺公〉が日中と勘違いしてしまふほど、強く輝きだす。

その神聖な輝きの中心にいる十香は、神秘的な美しさを放っていた。

極大の聖なるオーラは一誠たち悪魔には猛毒のはずなのだが、それでも全員がその美しさに目を奪われていた。

「コカビエル、あなたを絶対あの人に会わせない。あの人の視界にあなたが少しでも映

ることを、私は絶対に許さない。だから、ここであなたを――殺す」

十香がそう言った途端、〈塵殺公〉の輝きが一層強く増す。

その輝きは世界を聖なるもので照らす極光。悪を完全に否定する光。人々の希望が集まったかのような輝き。

その光を近く見ているコカビエル含む悪魔全員が死を覚悟した。

……あの光に触ればたとえ魔王であろうと跡形もなく消滅する、と。

「……バ、バカな……。こ、この俺が……。こんな小娘如きに……」

あり得ないと呟くコカビエル。まだ目の前の現実には理解が追いついていないようだ。だからと言って理解するまで待つつもりはない。十香は最後に言う。

「さようなら、聖書に記された墮天使の幹部、コカビエル」

そう、十香が口にしたと共に、極光を放つ刃が振り下ろされた。

それは斬撃とは呼べないものだった。それは天から与えられた罰だと主張するように、極光の柱となってコカビエルを飲み込んでいった――。

☆☆☆☆

〈塵殺公〉の極光の柱が少しずつ消える。完全に無くなると、コカビエルの姿も跡形もなく消失していた。

だが、十香は納得していなかった。

十香は一瞬の出来事が見えていた。極光の柱がコカビエルを飲もうとした瞬間、一つの影が尋常ではない速度で過ぎ去っていたのを……。

「……………」

地上に降り十香は、ギリギリのところまでコカビエルを助けた乱入者を無言で見上げた。

十香の視線の先。そこには白き全身鎧を纏い、背中から八枚の光る翼を広げた何者かが、コカビエルを肩に担いでこちらを見下ろしていた。

長い沈黙が流れる。

一誠たち悪魔全員は、先ほどの死を覚悟させられた輝きに動揺してか、空の乱入者を見ているだけだった。

先にこの長い沈黙を破ったのは……月をバツクに飛んでいる乱入者だ。

「素晴らしい戦闘だった。あのコカビエルがこうも簡単に倒されるとは思ってもみなかったよ」

全身鎧のため表情はうかがえないが、十香を賞賛したその声に嘘はなかった。

それに対し十香は、〈塵殺公〉の切っ先を相手に向け、言う。

「賞賛なんて要らないわ。私が欲しいのはあなたが肩に担いでるそいつの命よ。……置いて行って」

「それは出来ない。無理やりにもコカビエルを連れて帰ってアザゼルから言われているんでね」

「……………」

アザゼル……墮天使のトップに位置する存在。コカビエル以上の大物の名前が出てきたことに、十香はどうしようかと悩んだ。

個人的には、今すぐにも母親のためにコカビエルを消したい。しかし、ここであの乱入者から無理やりコカビエルを奪い、殺してしまった場合、下手するとアザゼル本人が動き、最悪の事態に陥ってしまうかもしれない。

ジブリールを思つての行動で、天界に、ジブリールに迷惑をかけてしまつては本末転倒もいとところだ。

ならここは引いた方が得策だろう。コカビエルを止めるといふ当初の目的は果たせたのだから。あの極光を直撃ではないとはいえ、間近で受けたのだ。コカビエルのいたるところから焼かれた煙が舞い上がり、翼に至つては根元から完全に消えていた。もう、コカビエルが戦うことは不可能だろう。それに、コカビエルのレベルは今回の戦闘で理解した。もし、また襲つてきたとしても、この程度ならばいつ出てきても消せる。

十香としては直ぐにでも消したかったのだが……今回ばかりは仕方がない。

そこまで考えて、漸く十香は〈塵殺公〉を下ろした。

「わかってくれたようで何よりだ。後はそこで寝ているフリードを回収して、俺は去るとしよう」

空から地まで降りた乱入者は、倒れている神父を担ぐと言った通り去ろうとした。

しかし、

『無視か、白いの?』

何処からか聞こえてきたその声により、動きが止まった。

『起きていたのか、赤いの』

またも、何処からか声が聞こえてくる。

誰が話しているのか、十香は探そうように見て、気付く。

悪魔の中の一人、一誠の左手にある赤い籠手と、乱入者である白い全身鎧からだった。

『せっかく出会ったのにこの状態ではな』

『いいさ、いざれ戦う運命だ。こういうこともある。また会おう、ドライグ』

『またな、アルビオン』

『おい! お前は何なんだ!』

一誠が聞く。

聞かれた方は、一度、一誠を一瞥すると飛び上がり、またも月をバックに見下ろす。

「我が名は白龍皇『アルビオン』。全てを知るには力が必要だ。強くなれよ、俺の宿敵君」

アルビオンは、一誠にそう言うと、最後に十香を見た。

「いずれ君とも戦つてみたいな」

それだけ告げると、今度こそ白龍皇は光の閃光と化し、高速で消えていった。

(ドライグにアルビオン……それつてもしかしなくても二天龍……!? ……という事は、あの男の子が赤龍帝?)

チラッと、一誠を見る。今代の赤龍帝を少し観察するために見たつもりだったが、悪魔全員の視線が十香に向いていたため、目があつた瞬間、戦闘態勢に入っていた。

十香の目的はコカビエルを止めるだけ。悪魔と事を構えるつもりはない。だがそれは、十香の都合であり、本来、敵関係のある相手がいれば警戒するのは当然のこと。

そこは理解している十香なので、向こうが一方的に警戒していようが気にしない。

(コカビエルにも勝てない相手なら警戒する必要はないしね。……あるとすれば赤龍帝の彼だけ)

赤龍帝と白龍皇は、『覇龍』を使えば一時的に神をも殺せる力を発揮する。故に、十香は彼だけを警戒して、観察していた……。のだが。

(何でだろう。あの子からは何故かお母さんと同じ気配がする……)

勿論、彼にジブリアルを感じるわけではない。だが、彼からは母親との気配がすごく似ている。

そう、いつも十香に変態行為を行うジブルールと同じ気配が……。見れば、彼の顔がだらしなないほど緩み、その視線は十香の顔や、胸へと向けられていた。

それを悟った瞬間、体温が瞬時に上昇し、十香は耳まで顔を真っ赤にした。

胸を腕で隠し、か細い声で言う。

「……そ、そんな、よ、邪な目で見ないで、ください……」

邪な眼差しなど、普段からジブルールに向けられているが、それは母親であるから大丈夫なだけ。同い年くらいの異性からそのような目で見られたことのない十香は、恥ずかし過ぎて涙目になってしまう。

『……………』

その様子に、一誠たち全員は固まった。

コカビエルを倒した時の雰囲気からかけ離れ過ぎていて理解が追いつかない、という理由もある。だが、それ以上に彼らが釘付けになったのは、その美しさにある。

言わずとも、十香の容姿は完璧だ。学園では二大お姉様と呼ばれているリアスや、姫島朱野も霞む程に。

美の女神すら裸足で逃げ出すと言われるくらいなのだから、それは当然ではあるが。

そんな十香が、胸を隠しながら顔を赤らめ、恥じらっている姿を見せているのだ。そ

れも涙目付きで……。

あまりの可愛さに故に、彼らは固まってしまったのだ。

一誠はブツ！ と、豪快に鼻血を出して倒れた。

「イツセー！」

一誠が倒れたことで、やっと彼らが動き出した。リアスが一誠を抱きかかえる。

「ぶ、部長……俺、あの子のおっぱい……触って死にたかった……」

「何を言っているの！ おっぱいならいくらでも私のを触らせてあげるわよ！ 吸わせてあげてもいいわ。だから気をしっかり持ちなさい！」

「いくらでも触らせてあげる……吸わせてあげてもいい……そんな素晴らしい日本語があつたのかー！」

（な、なに……あのやりとり）

まだ顔の熱が冷めない十香は、意味不明な出来事に混乱していた。

ーむ、胸って、そんな簡単に異性に触らせるものなの……？ わ、私には絶対無理

！

頭をブンブンも振って否定する。

堕天使の幹部を軽く倒す十香は、目の前で広がる未知の領域に、恐怖を覚えたー。

6話 エピローグ

未知の領域に恐怖した十香だが、少しすると正常に戻った。――戻ったとは言っても、またあの世界を見せられたらどうなるかはわからないが。

とりあえず十香は、もう一つの仕事……聖剣の回収、もしくは破壊のため聖剣を探した。

が、すでに粉々に砕け散っていた。

(まさかもう聖剣が破壊されているなんて……。けど、この分なら私が出さなくても教会から派遣された二人が持ち帰るよね)

そうとなれば後はもう教会へ向かい、天界に戻るだけだ。

いつまでも悪魔の領土に天使はいない方がいい。十香は戻ろうと踵を返した。

「ま、待ちなさい！」

「……なんですか？」

呼び止められた十香は振り返る。声の主はリアスだった。

「あなた、何者？ どうしてここに来たのかしら？」

今までの態度が一転、堂々と十香の目を見て話してきた。

別に答えず、無視して帰っても良かったのだが、これから何度か顔をあわせるようになるだろうから答えることにした。と言っても簡単にだが。

「教会から派遣されたエクソシスト。目的はコカビエルを止めること」

「そう。なら、その剣はなに？　みたところ聖剣のようだけど。ただの聖剣な訳ないわよね？　エクスカリバーすら霞んで感じてしまうほどですもの」

「その質問には答えられないわ」

「それもそうよね。敵に手の内を晒すなんてバカのことだもの」

「ーじゃあ、なんで聞いたんだろう……。」

口には出さないがそう思った。

それにしても、そろそろ帰っていいだろうか？　敵同士とはいえ、一応助けた形になったのだから形式だけでもお礼は述べるべきではないのか？　それも無しで自分の知りたい質問だけするって、どうだろうか？

少しムカムカした。

「目的も達成できた。私はこれで失礼しますね」

「待ちなさい！　まだ質問に答えてもらっていないわ」

強引に止めるリアスに、十香は微々たるものだが怒気と〈塵殺公〉をチラつかせなが

ら言う。

「私たちが敵同士とはいえ、一応私はあなたたちを助けたのよ？ それなのにのお礼の一つ無しに自分の知りたい質問ばかり？ 私は大抵のことは笑って許してあげる事はできるけど、自分の欲だけを満足させようとする輩は……嫌いだよ？」

十香は遠回しに「これ以上しつこいと、どうなっても知らないよ？」と言ったのだ。それを察したのか、リアスの顔には明確な焦りと恐怖が現れ、十香に謝罪した。

「……っ!! そ、そうね。ごめんなさい。……それと、遅くなったけどココビエルを倒してくれたこと、感謝するわ」

非常にいい辛そうだった。他人……それも協会側の人間に頭を下げるのは上級悪魔としてのプライドに触れたのか。それとも元からそういう性格なのか。十香にはわからなかったが、仮に十香が天使の仲間の前で悪魔や墮天使にお礼を言え、と言われれば、彼女同様、嫌々になってしまうだろう。

（これ以上は今後の関係に響くかもしれないからもう無理にでも帰ろう）
「では、いざれまた」

十香はリアス含む悪魔全員を見てからそう言い、教会へと走って行ったー。

☆☆☆☆

十香が消え、静寂が広がる。

誰もが今日起こった出来事を整理できないでいた。墮天使の幹部にそれを遥かに超える謎のエクソシスト。更には一誠の神器と対をなす白龍皇の登場。今日一日で自分たちの許量を超える出来事が連続で起こった。

いくら上級悪魔のリアスとさえ、混乱するのは当然の結果だった。

「ぶ、部長……」

眷属の一誠が、心配そうにリアスに声をかける。振り返ると、リアスの下僕悪魔たちが皆、心配そうに見ていた。

(ダメね。可愛い眷属たちに心配させるなんて……私もまだまだだわ)

リアスは自分の未熟さに自嘲気味な笑みを浮かべた。

「ごめんなさい。予想外の事態が立て続けに起きてうまく処理できていなかっただけなの」

リアスがそう言うと、眷属悪魔たちは確かにと頷いた。その動作から、みんなの疲れが現れていた。怒涛の一日だったのだからそれは仕方のないことだ。何を言おう、リアス自身もクタクタなのだから。

だが、この一日は悪くはなかった、とリアスは思っている。はぐれ悪魔になりかけていた木場祐斗が帰ってきただけでなく、聖と魔をまじ合わせた禁手(バランスブレイカー)、聖魔剣を習得したのだから。

(まずは、全員が生き残った事に喜びましょう)

リアスが眷属たちを見て、そう思った。

「リアス！ 無事!?!」

正門の方向から、焦燥の声が聞こえてくる。

振り向けば、この学園の生徒会長であり、上級悪魔のソーナ・シトリーとその眷属たちが額に汗を滲ませて立っていた。

「ソーナ！ 貴方こそ無事?!」

十香からは無事だと言われていたが、何の確証もなかったため、リアスはソーナの無事を確認した。

「私たちは全員無事です。結界を破られた時は驚きましたが……それにしても最後に見たあの光の柱は一体……」

リアスは、ソーナが結界を張る間の出来事をすべて話した。

コカビエルに圧倒されたこと、裕斗が禁手に至ったこと、教会から増援として来たエクソシストのこと、白龍皇がコカビエルとはぐれ神父を連れ去ったこと、そして、エクソシスト……十香がコカビエルを圧倒し、あの神の威光如きの極光の柱を放ったこと……。

ソーナは、白龍皇の乱入よりも、コカビエルを圧倒し、さらにはあの柱を放ったのが

人間だということに言葉を失っていた。

(目の前で見ていた私達ですら、未だに疑う光景だもの。ソーナが信じられないのも無理ないわ)

リアスは半信半疑の様子なソーナたちを見てそう思った。

「嘘だと思うのも無理ないけど、今はこの後のことを考えましょう?」

リアスはグラランドを見回す。学園の敷地内には、今回の戦闘でクレーターや、建物の一部が崩れていた。そのまま放置は出来ない。何せ、明日は普通に平日。通常通り授業が行われるのだ。今夜のうちに全て復元しなければ大事になる。

「そのようですね。椿、私達は校内の修復を。登校時間までにはなんとかなるでしょう。

……学園の管理は生徒会の役目、リアスは眷属の元へ」

後半はリアスへ向けられた言葉。ソーナは戻ってきた祐斗のことを気遣ってくれたことがその言葉から伺えた。

「ありがとう、ソーナ」

その気遣いに感謝し、リアスは可愛い自分の眷属悪魔達へと足を運でいったー。

☆☆☆☆

教会に戻ると、すぐに門が現れた。人間界に行くときと同じ門だ。

十香は開いた門を通っていく。眩しいくらいに白い空間。そこで一瞬、浮遊したよう

に感じる。

しかし、その浮遊感もすぐ治り、視界が開ける。そこは、先程までいた教会ではなく、天界だ。目の前には、ミカエルを含め多くの天使が十香の帰りを待っていた。

「お疲れ様です、十香。コカビエルを止められたようですね」

ミカエルから劳いの言葉がかけられる。

十香は「はい」と答えた。そして、コカビエルがどうなったかを伝える。

「倒したコカビエルは白龍皇によって回収されました。どうやらアザゼルの指示だったみたいです」

「白龍皇……それにアザゼル……」

白龍皇にアザゼル。その名前が出てきた途端、周りの天使達はざわざわと騒がしくなる。

ミカエルもその二人を警戒しているため、少し深刻に考えていた。

「ですが、赤龍帝と白龍皇の会話から、まだ赤白対決はする予定はないようです」

「そうですか……それは大変助かります」

「報告することは以上です」

十香がそう閉めると、考え込んでいたミカエルの顔が緩む。

そして、周りの天使たちに言う。

「考え事は後にしましょう。十香が怪我なく無事に帰ってきたことを喜びましょう」

ミカエルがそう言い終えると、周囲の天使達が一斉に盛り上がる。

四方八方から「おかえり〜」や「本当に大丈夫？」と、十香を気遣う言葉がたくさん送られた。誰もが心から十香のことを心配していたのだ。

十香はそれを強く感じた。

嬉しくて、涙が出そうだった。

十香は涙をグツと堪え、笑顔を浮かべる。

その笑顔は太陽のように眩しく、それを向けられた多くの天使が悶絶した。

中には墮天防止警報を鳴らすものまで……。

警報が鳴ったことで、十香は心配になり、その天使に寄り添おうとしたところで、ミカエルに止められた。

そして、ミカエルが落ち着かせることで何とか墮天は防止した。本当に墮天してしまつては洒落にならないからだ。

墮天の危機が去り、再度盛り上がる。

するとそこで、十香はここ第六天に物凄いスピードで近づいてくる気配を察知した。

何だろうかと様子を見る十香だったが、すぐに気づいた。

雷の如く速さで接近する十二枚の翼を持った天使。プリズムのように光を反射させ、

虹のように見える特徴的な髪。それは、十香が尊敬する天使と同じ。

その人物だとわかると、十香の顔が、さつき以上に輝きだす。

周りの天使たちは一齐に十香から目を反らす。それでもしないと、十香の笑みにやられて、墮天しかける輩が出てくるからだ。

十香から視線を逸らした天使たちは、先ほどよりもさらに上の笑みを見れず、皆が歯噛みし、悔しそうにしていたのだが、十香が気づくことはない。

何故なら、今はこちらに光速で来ている人物に夢中だったからだ。

十香はこちらに向かってくる人物を呼ぶ。

「お母さんー!」

「十香ちゃあああああんっ!!」

近くまで来ると急降下し、降り立つ。そして十香めがけ一直線に踏み込み、抱きついた。

怪我が無いか、調べるように体をぺたぺたと余すことなくジブリアルは触りだす。

抱きつかれたと思ったら急に身体を弄られ、十香は固まる。

そして、ジブリアルの手が十香の胸に触れたとき、むにゅと手が沈み、それを跳ね返す弾力のある動きに、見ていた天使たちがまたも警報を鳴らす。

当のジブリアルは一切警報に引っかからない。

あまりの理不尽さに、他の天使たちはジブリールを睨みつけるが、ジブリールは十香に夢中で気付かない。

と、ここで漸く動けるようになった十香が言う。

「ーちよつと、お母さん！ 他の人たちが見てる前で恥ずかしいから止めてよ！」

十香は恥ずかしさのあまり林檎と同じ色に顔を染めて、母に抗議する。

が、その程度の抗議で止まるジブリールでは無い。ジブリールが堂々と言う。

「これは十香ちゃんが怪我していかないかの確認です。後から異常が見つかってても大変だから、今行っているだけであつて、決して、早く十香ちゃんに抱きついて身体を撫で回したいとか、そんなやましい気持ちを抱いている訳じゃないのよ？ 全然これっぽっちも」

怪しい。怪しすぎる。

真顔で言っているが、動く手はイヤラしすぎる。的確に、十香の胸やお腹、お尻などを触るあたり、確信犯だろう。それか無意識のうちか……身体は正直なのだ。

「ひゃんー」

母の手から逃れようとするも、絡みつくように動くジブリールの手に、十香は逃げられないでいた。

それを見かねたミカエルが、夢中になるジブリールに近づき、

「ジブリール」

「ツ……！ は、はい……なんでございましょう、ミカエルさま……」

それはもう美しい笑みを浮かべるミカエル。それに怯えるジブリール。漸く自分の行なっていた行為の度が過ぎていたことに気がついたようだった。

ミカエルは呆れながらも言う。

「別に親子のスキンシップを止めろ、とは言いません。ですが、もう少し周りとは十香のことを考えてください。見目麗しい十香の艶姿など他の者たちでは墮天を耐えることができません。これ以上純血の天使が誕生しないのですからその辺りは控えて行動してください」

「……了解でございます」

そう言つて十香を離すジブリール。母の魔の手から解放された十香は、胸を両手で隠し、その場にペタンと座った。

「お母さんもう少し節度をわきまえて」

「え？ 節度をわきまえたら触ってもいいの？」

「お母さん？」

「嘘ですごめんなさい」

「まったくもう」

呆れる十香だが、いつも通りの母を見ることができてほっと胸をなでおろしていた。十香は立ち上がると、まだいっていなかったことを思い出し、ジブリールを見る。

ジブリールがどうしたの？ と心配そうに聞いてくるが、十香はニコツと笑顔で――

「ただいま！ お母さん！」

「……お帰りなさい、十香ちゃん！」

その後、天界はお祭りのように盛り上がったという。

停止教室のヴァンパイア

第7話 聖女との再会

コカビエルを倒して数日。

十香はいつも通り家で家事を行っていた。母親のジブリールは熾天使であるため、多忙を極めている。そのため、家のことは必然的に十香の役割となる。

尊敬している天使で、母親であるジブリールにこれ以上負担をかけさせないため、十香は喜んで家事を行う。

そして今日は食材を揃えるため天界から地上、つまり人間界に降り立っていた。

別に食材などは天界にもある上、他の天使が買いに行ったりするため十香が行く必要はないのだが、十香は街を歩きたいため、自身が買い物に来ているのだ。

「今日の飯は何がいいかな〜」

太陽が眩しい昼下がり。スーパーに向かって歩く十香は今晚の夕食について頭を悩ませていた。

十香は料理は得意だ。大抵のものなら作れるだけの腕はある。ならば何に悩んでい

るのか？ それはジブリールに何を食べてもらえれば疲れを取ってもらえるか、だ。それなら栄養を重視したものにすればいいのだが、毎度それだとたまにはガツツリとしたものも食べたくなるだろう。

ジブリールならば十香の作るものなら何でも美味しそうに食べてくれるだろうが、それでは十香が納得しない。

さてどうしたものか……。顎に手を当て悩む十香。その様子を通り過ぎる人達全員が十香を見ていたのだが、十香が気づくことはなかった。

「う〜ん……あ、猫だ！」

道の端を歩く二匹の猫を見つける。その猫は黒と白と色が反対だったが、十香の目には姉妹や兄弟に映った。

「かわいい……」

無意識のうちにポツリと呟いていた。

ニヤーと鳴き合う二匹。姉妹、兄弟は仲がいいのが一番。微笑ましくて自然と笑みがこぼれていた。

ふと、視界の端にもう一匹の黒猫が見えた。何故だかその猫が無性に気になり観察している、黒猫が黒と白の二匹の猫を見つめているのがわかった。その視線からは、妬み、懐かしさ、悲しみ、そして後悔……が強く伝わってくる。

どうしてそんな思いが伝わって来たのかわからないが、知ってしまった以上はどうにかしてあげたい。そんな気持ちが十香の心から湧き上がり、気づけば足はその猫へと向いていた。

あの二匹の猫に夢中になっている黒猫は、十香が近づいているのに気づいていなかった。

「どうしたの?」

しゃがみこみ尋ねる。猫が人の言葉を理解できないのはわかっているのだが聞いてしまった。瞬時に周囲を見渡す。人がいないことを確認すると十香はホッと胸をなでおろした。

「……はっ、そうだ猫ちゃん」

十香は先ほどの黒猫の方を向く。すると、そこにはこちらを警戒する猫の姿があった。

「え? ど、どうして私は警戒されているのかな?」

低く唸る黒猫に十香は困惑する。だが猫は警戒心の強い動物、当たり前前の反応かもしれない。

しかし、生まれてこの方、生き物には好かれる十香は初めての経験で少なからずシヨックを受けた。

めげずに十香は右手を黒猫に近づけていく。今まで以上に唸り、身体を低くし、いつでも飛びかかれる姿勢をとりはじめた。

「大丈夫。私はあなたに危害を加えたりしない」

目を見てそう告げる。場合によっては猫と目をあわせるのは逆効果になるのだが、十香の暖かい眼差しには黒猫も勝てなかったようで、姿勢を戻し、唸りを潜める。が、警戒心が完全に溶けたわけではないようだ。

「ほらほら、怖くないよ」

手が首元を撫でる。ふわふわした猫の毛が手に伝わってくる。その触り心地よさに、十香は夢中で撫で始めてしまった。首元、顎、鼻の上、頭、背中、お腹。どこも上質な毛並みに気づけば抱き上げていた。

「ニヤツ!？」

黒猫が驚きの鳴き声をあげる。十香の腕から逃れるようジタバタと爪を立ててもがき始めた。

「あ、ごめんね? 急に抱っこしちゃって……嫌だったよね」

「……ニヤ」

どこかホツとした様子の黒猫。解放されることに安心したのだろう。

だが——

「……でも本当にごめんね。撫でる手が止まらないの」

「ニヤニヤーッツツ!？」

手が、指が一本一本まるで意識があるようにヌルヌルと動き黒猫を撫で回していく。初めは嫌だと足掻いていた猫だったが、ツボを上手い具合に刺激され、今では逃げる素振りすら見せず、完全に堕ちていた。

「……二、ニヤア〜」

ビクツと震え、甘い声でなく猫。そのテクニツクは最早疑いようもない。あの手の、指の動きは十香の身体を撫で回すジブリールのそれと同じだ。

「……………ハッ! ぐ、ごめんなさい!」

十香は、腕の中でぐったりしている黒猫を見るや否や慌てて撫でる手を退ける。伸びている猫を見てやり過ぎたと反省した十香だが、とても気持ちよさそうな姿を見て、安堵した。

十香はこれ以上はダメだと、黒猫を離そうとしたのだが今度は逆に猫の方が離れなくなった。十香の腕にしがみ付き、絶対にはなれまいと鳴く。

「え、え? 急にどうしたの!？」

戸惑う十香に黒猫はチャンスと見たのか、腕を駆け上り、肩にちよこんと陣取った。そして髪の毛を掻き分けて首元まで顔を近づけると、チロつと十香の首筋を何度も舐め

始めた。

「ひあああつ！ どこ舐めてるの〜」

ゾクゾクとなんとも言えぬ感触が十香を襲う。そのせいでみつともなく悲鳴を上げてしまった。その隙に黒猫が十香の肩から飛び降り、こちらを一瞥した後、素早く走って逃げていった。

「……………ビツクリしたあ……………」

ヘナヘナと地面に座り込む十香は舐められた首筋を抑えながらそう呟いた。

「……………早く買い物に行かなきゃ」

まだ顔が熱い。だがずっと地面に座り込んでいるわけには行かない。十香は立ち上がると汚れた服を払ってから歩々を進めた。

「ありがとうございます！」

店員の元気な挨拶を背に受けながら、十香はスーパーの扉を潜った。今日は悩んだ末、肉じゃがを夕食に決定し、両手にはジャガイモやニンジンなどの食材が入った袋を持っている。

「ふふふ、これでお母さんに美味しいご飯を作って上げられる」

語尾に音符が付いていると思うほど上機嫌な十香。先ほどの慌てようから一転して、鼻歌でも歌う勢いだ。しかし、外ではしやく真似はせず、夕焼けが差す中、帰り道をゆつくりと歩く。その際、風が吹き抜け髪がなびく。十香は荷物を片手で持ち、風で揺られる髪の毛を抑えて整える。

ただ髪を整えただけ。髪が乱れば誰だつてする仕事だ。しかし、それを十香が行うだけで全く別のものに見える。ただの道端であろうと、一枚で軽く数億は売れるであろう絵画のように生まれ変わる。

画家ならば絶対に描きたいであろう一枚。十香の華麗な姿は、見る人を釘付けにさせた。

「必要なものは全部買ったし、そろそろ帰ろうかな？」

あまり遅いとジブリールに心配をかけてしまう。そうなると色々と面倒なため、十香は歩々の速度を速め駒王町にある教会に急いでいった。

☆☆☆☆

教会はこの町の外れにある。意外に距離があり、その道中は家が並んでいて、お店や飲食店などは見当たらない。更に今は夕方。誰一人として見当たらない静かな通り道になっていた。そこで、教会へ向かう途中、公園の前を横切る。と同時に視界の端に二人の人影を見た。

公園に人がいるのは当たり前だ。だから人影があらうといつもは気にせず通り過ぎるのだが、今回はそういうわけには行かなかった。

「あの人影……それにあの綺麗な金色の髪は……」

見覚えのある人影に、十香の足は自然と公園に向かっていった。

近づいていくと、小さな男の子とどこかの制服を着た金髪の少女が話をしていた。

「男の子ならこのくらいで泣いてはダメですよ。ーはい、傷は治りました。もう大丈夫」

「ありがとう！ お姉ちゃん！」

どうやら怪我をした少年の手当てをしていたようだ。少年は感謝の言葉を述べると、元気よく走り去っていった。見えなくなるまで手を振って見送っていた少女に十香は声をかけた。

「……………もしかしてアーシア・アルジェント？」

「え？」

急に名前を呼ばれて驚いたのか、金髪の少女は身体ごと十香に向けた。正面から向かい合う。彼女の顔を見た十香はやはりと、自分の予想が当たっていたと安心する。逆に彼女の方は十香を見ると、綺麗なグリーン色の双眸が大きく見開かれた。それはもう絶対に会えないと思っていた友人と再会したときのよう。

彼女……アーシア・アルジエントの瞳が揺れ、唇が震えだす。

「も、もしかして……」

瞳に涙をため、両手を口元に当てて驚くアーシアの言葉は震えていた。十香はアーシアが話すまで待つ。

するとアーシアは声を詰まらせながらも話し始めた。

「な、七星……十香、さん……?」

「……………うん」

ゆっくりと、しかしはつきりと肯定するように頷く。

歓喜の表情を見せるアーシア。だがすぐに疑問の表情となり十香に尋ねた。

「……………ッ！ 本当に……でも、どうしてここに……」

十香は両手に持つ袋を軽く持ち上げて言う。

「買い物のお帰りの帰り。今日買っておかないといけなかったから」

「でも十香さんは天界に……」

「たまたま地上を歩きたくなるのよ……」

お互いに沈黙が続く。

別段、彼女、アーシア・アルジエントと仲が悪いわけではない。むしろ逆。昔、まだアーシアが教会で聖女として多くの人々を癒していた頃。数日間、教会で暮らしていた

十香はよくアーシアと遊んでいた。

期間は短かったが、本当の姉妹のように数日時間を共にした、十香にとってとても大切な人。

だが、今では聖女と呼ばれていた彼女が『魔女』と軽蔑され、教会から追放され、悪魔に転生までしてしまった。

彼女の雰囲気から悪魔の気配が強く感じ取れる。

しかし、十香はアーシアが悪魔になってしまった原因をよく知っている。それ故に、数年ぶりの親友を前にしてもうまく会話が続かないのだ。

もしかすると、彼女はあの時何もできなかった自分を恨んでいるかもしれない。そう思うと気軽に声をかけられるわけがなかった。

話しかけることも、この場から立ち去ることもできず、二人の間に痛いほど長い沈黙が訪れる。

だが、それは目の前の少女が勇気を持って話しかけてきたことで終わる。

「あ、あのっ、私……」

俯いてしまうアーシア。

しかし、彼女は勇気を出して十香の瞳を、その綺麗なグリーン色の眼でまっすぐに射抜く。

十香は、こんなに強い眼ができたのかと、一瞬たじろいだ。

「私……十香さんと、もう一度あえて嬉しいですよ。今は立场上、敵同士ですけど、それでも！ 私は十香さんとまた顔を合わせて、お話することができて、本当に……あの頃に戻れたみたいで……嬉しいですよ……っ」

「ツーー!!」

あの頃、とはやはり教会で過ごしたあの数日のことなのだろう。十香もアーシアと同じ気持ちだった。もう二度と会えないとすら思っていたのに、偶然とは言え再開することができたのだ。今は亡き神の導きなのかもしれない。十香はそう思った。

「こうして会えたのも主のお導き……あうー」

アーシアも十香と同じ考えだったようだが、主と、祈るように口に出すと頭を抑えて呻いた。

それはアーシアが悪魔である証拠。気配などで感じてはいたが、実際目の前で彼女が悪魔だと認識してしまうと、悲しみで胸が張り裂けそうだった。

「……アーシア、ごめんなさい。私が貴女を助けられなかったから……悪魔に……」

「いいえ、十香さんのせいではありません。全て、私が悪いんです」

そんなはずはない！ そう叫びたかったが、アーシアの頬を伝う一雫の涙を見て、十香は喉を詰まらせ、うまく言葉が出せなかった。

「十香さんは何も悪くありません。私を追放した教会も恨んでもいません。そして、あの時、悪魔を癒したことを後悔したこともありません。目の前で傷ついて倒れている人を悪魔だから、墮天使だからという理由で放っておくこと、できませんから」
なんて……なんて心の優しい娘なのだろう。

今まで聖女として教会に、天界に、神に身を捧げていたはずなのに途端に魔女と呼ばれて、聖職者から追い出されて恨み一つないなんて……。

十香ですら、アーシアを追放したのが天界の決定だと聞かされた時は恨みや憎しみの感情を抱いたというのに。

彼女は悪魔になろうが優しいまま。十香は彼女こそが聖女だと、心の底から思った。

アーシアは語る。

悪魔になつてから素敵な人との出会いがあったと。親のいなかった自分に、両親ができた。

それはもう嬉しそうに話すアーシアを、十香は笑顔で聞く。

本当は今すぐ抱きしめて、またあの頃のように話したかった。だが、幾らアーシアが自分に罪はないと言ってくれても、親友と呼べるアーシアを追放させてしまった、という罪悪感には消えない。

その故に、十香はあと一歩が踏み出せない。

（私には、アーシアを抱きしめる資格なんてない。それ以前に、私は半分とは言え天使。アーシアを抱きしめれば私の無意識のうちに流れている光力が彼女を苦しめてしまう。だからー）

十香は二度と、アーシアをこの腕で抱きしめることができない……。

それを思うだけで涙が出そう。しかし、十香が泣くわけにはいかない。それ以上に辛い思いをしてきた彼女が、今を精一杯生きているのだから。

（これは私の罪の証。アーシアという存在が私の、強いては天界の罪）

涙を拭って、楽しそうに今を話すアーシア。彼女の幸せをもう壊させないよう、十香は見守ることを決意した。

と、そこでアーシアの名前を叫びながら血相を変えた一人の男性が駆けつけてきた。

「アーシア大丈夫か!? さっき泣いてただろ!? ごめんな、俺が少し離れたばかりに！ おい！ よくも家のアーシアを泣かして……くれた……な……」

アーシアを背後に隠し、叫んだ男性の言葉がどんとん小さくなり、最後の方にいたつては全く聞き取れなかった。

見れば、その男性には見覚えがあつた。

「赤龍帝……兵藤一誠……」

そう呟くと兵藤一誠の顔つきが変わり、瞬時に神滅器の赤龍帝の籠手を出現させる。

「き、教会側のあんたが何でこんなところにいる！」

「イツセーさん!？」

声が硬い。それも当然だ。兵藤一誠は知っている。七星十香の実力を。自分では到底勝てないとわかつていても、彼はアーシアを守るように立っていた。

「あんたもアーシアが魔女だから殺すとか、そんな巫山戯たことを抜かす連中の一人か！ かつてに聖女だとか祭り上げておいて、悪魔も癒せると知った瞬間に捨てた、魔女だとか抜かしてアーシアを追放させたあの連中たちの……!」

彼がここまで過剰に反応するのはゼノヴィアやイリナの例があつたからだ。その上、十香のあの神聖さを直視して、十香が悪を絶対に許さない人間だと思ひ込んでしまっている。故に兵藤一誠はアーシアを守るため、怖くても前に立つ。

「いいえ、そんなこと……!」

アーシアの追放を見逃していたという点では彼の言っていることが当たっているため十香は狼狽し、どう答えたらいいいのかわからなくなる。

「もうアーシアは教会の人間じゃない! あんたもアーシアを見捨てた一人なら、これ以上アーシアに関わらないでくれ!」

「……ツツ!!!!」

『アーシアを見捨てた』。

十香はハンマーで頭を殴られる思いだった。やはり、事実を他人から突きつけられると心にグサリと刺さる。

「……………」

泣かないよう我慢していたが、ついに耐えきれずポロポロと、十香の瞳から涙が溢れる。何か話そうとしても、漏れる嗚咽のせいであまりうまく言葉が出ない。

いや、それ以前に心が痛かった。兵藤一誠の言葉が刃物のように鋭く刺さり、ズキズキと痛む。

「イツセイさん！ 言い過ぎですー！」

「アーシア……………あつ」

兵藤一誠が十香の涙を見て言い過ぎだと反省する。

（違う。アーシアはそんな怒った顔をしてはダメ。笑っていないと。貴女の笑顔は周囲の人たちを幸せにできるのだから）

それを伝えようとするが、やはり上手く言葉が出ない。

唯一、言葉に出せたのが、

「…………ごめんなさい…………ごめんなさい…………」

アーシアに対する謝罪の言葉だけだった……。――。

☆☆☆☆

「ただいまにや〜」

「あ、お帰りなさいー黒歌さん！」

黒猫……黒歌は猫の姿から人の姿へと戻る。黒い着物を着崩している。出迎えてくれたのは仲間のルフエイだ。

「黒歌さん？ 何かあったんですか？」

「……何でそう思ったにや？」

「え、だっていつもより顔が緩んでいますし、何となく機嫌がいいな〜って」

「そ、そんな事ないにや！」

「本当ですか？ 少し顔が赤いようですし。絶対何かありましたよね？」

何でもないかと何度も繰り返して問い詰めから逃れようとする。

（あの指の動きは反則だったにや。極上の気持ちよさがあつた……。また会いたいにや。まあ、マーキングはしたからいつでも会えるけど！）

黒猫は舌をペロツと出したあと、ニヤリと笑うのだった。

第8話

奇跡の天使 8話

十香の様子がおかしい。

一早く気づいたのは、十香の母親であるジブリールだった。

いつも笑顔を絶やさず天界を明るく照らしていると言っても過言ではない十香。しかし、人間界から帰ってきた十香の笑みは、影が差していた。

無論、十香は帰る途中にあんな事があったと悟られないよう普段通り皆んなに接していた。天使たちは十香の笑みに違和感なく挨拶を交わすだけ。だが、ジブリールだけはどこか普段と違うと感じ取っていた。

十香の繕いは完璧だ。なのに、その変化に気づくのはやはり、母親だからこそなのだろう。

ジブリールは台所で夕餉の支度を始めている愛娘を観察する。僅かに感じた違和感の正体を探るため。一挙一動見逃すまいとじつくり、じつとりとー。

「な、なに？」

そんな視線に気づいたのか、十香が一步後ろに下がり戸惑いがちに問うた。

十香を不安がらせるわけにはいかないと、ジブリールは同性すら虜にする甘い笑みを向ける。

「何でもないわよ」

「ツーー!!」

その妖艶さに十香が頬を赤らめそつと顔を逸らした。可愛らしい仕草に心洗われるようだが、ジブリールはそれを見逃さなかった。

光の当たり具合で偶然見えたもの。しかし、ジブリールにとっては見逃すことのできないもの。

十香の目尻から、頬に伝って一筋の跡がー。それが意味するのは様々。だが、いつもより暗い十香を見ると、自ずと答えが出る。

ー………それは、

(私の十香ちゃんか、誰かに泣かされたー(？))

そんな確証はない。だけど何故か確信できた。自分の最愛の娘が誰かに泣かされたと言うことに……。

心の中でプツンと何かが切れる。

刹那。

ジブリールの体全体から眩い光力が弾け出した。あまりの眩しさに十香が腕で目を

塞ぐ。しかし、今のジブリアルにそれを気づくことは出来ない。

眩い光。それと同時にジブリアルと十香の二人にしか見えない精霊まで集まりだした。

まずい……っ！

十香はジブリアルの突然の豹変さに驚きはあつたが、即座に危険と判断し止めに入る。

ただ光力が集まるだけならよかつた。しかし、ジブリアルと十香しか持たない精霊回路を用いた精霊な吸収、それだけは見逃せない。

ジブリアルの背中からは十二枚の純白の翼が精霊を吸収することによって力が蓄えられ金色に輝く。

「十香ちゃん……あなたを泣かせなどはどこのゴミでございましょうか？」
「……………え？」

「あなたの頬に泣いた形跡が見られました。私の十香ちゃんを傷つけたゴミはどこにおいでで？」

ジブリアルは嘗てない怒りを覚えていた。ここまで激情を抱いたのは生まれて初めてなほどに。十香を泣かせた人物は、ジブリアルの逆鱗に触れたのだ。殺戮天使と呼ばれ、最も多くの敵を屠ってきた大天使の……。

そこで十香は気づく。今のジブリアルが母親としてではなく、熾天使として降臨しているのだと。口調の変化が何よりの証拠。ジブリアルは十香と接する時とミカエル含め天使と対面する際は口調が変わる。熾天使モードとでも言えばいいのだろうか、兎に角いまのジブリアルに詳細を話せば間違いなく、その人物は……人間であれ殺されるー。

そして、それが悪魔や墮天使ならー、
間違いなく戦争が再発するっ！

十香の脳裏には夕方に出会った、悪魔に転生したアーシアと赤龍帝、兵藤一誠の姿が浮かぶ。

本当のことを言うわけにはいかない。しかし、熾天使として前に立つジブリアルに嘘は通用しない。だから本当のことを話しつつ、不自然のない話に組み替える。

「さあ、教えてくださいますか？ その死にたがりな輩。望み通り塵にしてごさいますから」

ジブリアルの瞳に質量を感じさせる程の殺意がギラツと覗かせる。十香に向けられた訳ではないにも関わらず、体が竦みあがる。翼を広げ、いつでも殺しに行けると伝えて来る。金色に光る翼に十香には見える精霊がジブリアルに集まる様子はただただ神々しく、美しかった。

——これが天界の超越者——。

十香は無意識にごくつと喉を鳴らす。

尊敬し、目標にする天使は遙か先にいる。

その事実を再確認した十香は、ジブリールを落ち着かせるために泣いた訳を話し始める。

あつたことを正直に話すのではなく、少し変えて、違和感ないように。

「……今日の帰り道の途中で、アーシア・アルジェントに、会った、の」

「————ッ!?!」

ジブリールは思わず眼を見張る。まさかここでその名前を聞くことになるとは思っても見なかったのだ。

《トワイライトヒーリング》を有し、教会に『聖女』の名で通っていたシスター。悪魔や堕天使すら癒せてしまう力を持ったと言うことで追放された『魔女』。

そして——

七星十香の親友だった子……。

ジブリール含め全ての熾天使が最後の最後まで頭を悩ませた案件。

数少ない十香の理解者であり、友人だった彼女。

神が亡き今、不安要素はそばに置いておく、ギリギリでバランスを取っていた天界には余裕はなかった。

しかし、『聖女』は十香の理解者……。

どちらも大切だ。しかし、世界の平和と十香の理解者——天秤にかけた結果……前者となった。

ジブリールは最後まで反対した。娘一番を信条とするのだ、娘が大切な親友と言った彼女を追放など選択できる訳なかった。

しかしどの種族であろうと多勢に無勢は変わらない。ジブリール以外の熾天使が反対に回れば結果は必然的に数の多い方へ流れた。

そんな彼女と再会した。それを聞いて冷静になれた。ジブリールは光力を抑え、精霊の吸収を止める。翼も直してジブリールから母親に戻る。

十香の表情に、嬉しさの色が浮かぶ。

「久しぶりだったけど、何にも変わってなかった。あの頃の……優しくかった頃の彼女まんまだったよ」

声が震えていた。ほんのりと赤らむ頬に雫が一筋。涙に一瞬反応したが、十香を見れば大丈夫だと思った。

だつてー

涙を流していても、嬉しそうに満面の笑みを浮かべているのだから。例えそれが、少し改変された話だったとしてもー。

☆☆☆☆

夕食を終えてお風呂から上がった十香はベットに腰を沈めて先ほどの出来事を振り返っていた。

あの時、十香が流した涙は演技でもなく本物だ。本当にアーシア・アルジェントとの再会が嬉しかった。そこに嘘偽りはない。あの公園とでは涙の意味は違ったがアーシアの件で泣いたと言うのは同じなためジブリールを騙した事にはならない。

十香は身体を投げ出し横たわる。ふかふかの布団に身を包まれ力を抜く。
(本当は気づいているんだろなあ)

あの見透かした表情は間違いなく気づいている。十香は確信していた。
(それでも怒りを抑えてくれたのは私が真実に基づいて言っていたから)

あそこで思いつきの言い訳を述べていたらどうなっていたか……想像するだけで恐ろしい。答えるまで問い詰められた後、イッセーが消されていたかもしれない。

悪魔の一人……とは言うけれど彼はアーシアの友人らしかった。その彼が死んだとなるとアーシアは悲しみに暮れるだろう。そんな最悪の事態にならず人知れず安心した。

一先ず、今のアーシアが誰かに愛されて安心して暮らしているを知れたのは良かった。

「欲を言えば、その誰かは私が良かったなあ……」

そんな十香の呟きは誰の耳に届くことなく静かな部屋に浸透していった。

と、不意に部屋のドアがノックされた。この家には十香とジブリールしかない。であるなら誰が来たかは自ずとわかった。

十香がどうぞと声をかけるとドアノブが下がりに開く。そこには十香同様、お風呂から上がったジブリールがいた。上がったばかりなのかほんのりと肌が赤らんでいる。

突然入って来なかったと言うことは真面目なお話なのだろう。

「どうかしたの?」

「ええ。食事のときに言おうと思っていただけですけどすっかり忘れていたわ」

部屋に入って私のベッドに座るジブリール。十香もそれに合わせて起き上がった。

「それで。何を言おうとしていたの?」

十香はジブリールが世間話を始める前に本題に入る様に催促した。案の定、先に釘を

刺されたジブリールが不満そうに口を尖らせていた。

その子供の拗ねた様な行動が可愛らしくてクスリと笑う。

「あつ、笑ったな〜」

「きゃつ！ 急に抱きついて来ないで……！」

仕返しとばかりにジブリールが身体を密着させて来る。十香の腕にジブリールの豊かな胸が押し付けられムニムニと気持ちのいい感覚が襲って来る。それに伴い石鹸のいい匂いと混じり合った大人の女性特有の香りが十香の鼻腔をつんツと刺激し、胸打つ鼓動が早まり体温が上昇する。

ジブリールに変化を気付かれなくなかった十香は誤魔化すように身体を振り少しでも離れようとした。

しかし、それを目ざとく察知したジブリールはニヤつと笑みを浮かべて更に十香に身体を寄せる。

「あらあ。十香ちゃんの心臓、すぐドキドキしてる……それに顔も凄く赤くて熱い……」

「ひゃ、あああ……！」

熱っぽく耳元で呟かれ、ゾクツと背筋がむず痒くなる。十香は耳が弱い。少しの刺激だけで先の様に悲鳴を上げるほどに。

当然、その事をジブルールが知らないはずが無い。

可愛らしい悲鳴をあげる十香の姿はその気がなくても嗜虐心を刺激され、もつと虐めたくなる。

当の十香は必死に逃げようともがくが、がっしりと腕を固定しているジブルールは中々離れない。

もう一瞬だけ天使の力を使って逃げようと考え、実行に移そうとしたが考えを読まれていた。

「……天使の力を使おうなんていけない子。これにはお仕置きが必要ね」

そう呟きながら息を吹きかけられ、体から力が抜ける。

「ひゃううう……っ！……このお……っ！」

顔を恥辱に染め、瞳にたつぷりと涙を溜め込みながら、精一杯の力を振り絞って抵抗しようとしたが——、

「うひゃあああっ!？」

「ふふふ、ふあいかわらふみみがよはあいわねえ」

耳を甘噛みされて、抵抗虚しくジブルールに好き放題された。その後も何度か脱走を試みたが、完全に主導権を握られて尚且つ弱点を刺激され続けた十香に既に抵抗の意思などポツキリ折れていた。

「はあ、はあ……、んくつ、はあ……はあ……」

「んっー！ たっぷりと十香ちゃんを堪能できたし、今日はここまでにしておきますか」

そう言つて漸くジブルールが離れた時には、十香は完全に蕩けきつていた。

先ほどの攻防——一方的にジブルールが攻めただけ——で服が乱れ、真つ白だが可愛い装飾の入った下着が露わになっていた。肌も何処と無く赤みがかかり、汗がツーと流れる。瞳には涙をためて、切れた息を整えるために漏れる吐息がとてつもなくエロい。

完成された美、とまで言われる十香の艶姿……他の天使が見れば一発で墮天は免れないだろう。

呼吸を正した十香は、自分の今の姿に気づきジブルールに背中を向けて乱れた服を直した。

最後に深呼吸を一つして、キツとジブルールを睨みつけた。

「と、十香ちゃん……？ そんなに睨んでいたら可愛い顔が台無しよ……？」

「……………」

今更になつてやり過ぎたことに気がついた様で、ジブルールが慌てて取り繕うが、

「……………明日の晩御飯抜き」

「ごめんなさああああいつ！」

ジブリールの言い忘れたことというのは、近々駒王学園で三大勢力の会議が行われるから一緒に来て欲しい、との事だった。

「……どうしてそんな重大なことを、私で遊んでないで早く伝えなかった……。と、思うのも仕方のないことだった……。」

第9話 決意と悩み

「何ですって?!」 アザゼルだけでなくあの時の教会のエクソシストもこの街にいたというのっ?」

放課後の部活の時間。

校舎から離れた場所にあるオカルト研究部の一室から女性の驚きに染まった悲鳴がこえました。

女性の座る椅子の後ろに控えるようにして立っていた長い黒髪を後ろで束ねた女性、姫島朱乃が主人であるリアス・グレモリーを落ち着かせるために紅茶を目の前に置く。

「ありがとう朱乃」

装飾の施されたカップを口元に運び一口。

仄かな甘みが口内を満たし、それを味わってから喉を鳴らす。

吐息と一緒にカップをテーブルに置いた。

その様子を赤龍帝こと兵藤一誠は当事者である太陽を浴びて煌めく美しい金色の髪とクリッと開かれたグリーン双眸が特徴の元シスター、アーシア・アルジェントと共に

に神妙な顔で控え見ている。

「ぶ、部長？」

僅かな沈黙をひどく嫌ったイツセーが、恐る恐る主人の反応を伺う。

まさか偶然出くわしたただけでお説教を受けることはないと思うが、それでもことは重大である。何を言われるか怯えてしまうのは仕方のないことだ。

イツセーは自分にそう言い聞かせて主人の反応を待った。

すると、目頭を指でつまんでいたリアスがその真紅の瞳をようやくこちらに向けた。

その瞳にはこちらの安否を心配する色が浮かんでいた。

「怪我は？ なにもされなかった？」

「はい。俺もアーシアも無事です。アーシアが泣いている時は何かされたのかと焦りましたけど」

「……何ですって？ アーシアが泣いていた？」

と、ここで真偽を問うように視線を向けられたアーシアは静かに「はい」と答えた。その返答にリアスの眉が釣り上がる。

……あ、部長、すげえ怒ってらっしゃる。

妹同然のアーシアが泣かされたと聞けば激情するのも無理はない。

なにせイツセーも同じだったのだから。敵は格上。戦闘になれば万が一、いや、億が

一も勝ち目がなく、確実に殺されるであろう相手だったが、アーシアが泣かされたことを許せるはずなかった。

だからリアスの怒りは至極もつともであるのだが、今回はその怒りは早とちり以外の何でもない。

リアスの怒りが爆春する前に止めようとするが、それより先にアーシアが話を続けた。

「泣いてしまったのは本当です。でも、それは十香さんともう一度会うことができただけです。決して、傷つけられたわけではありません！」

「そ、そうなのね……。それより十香ってあのとき現れた女性の名前かしら？」

「はい」

アーシアが彼女を知っていても不思議はないだろう。アーシアも元とは言え『聖女』として崇められていたのだから。

故にリアスだけでなく、オカルト研究部のメンバーに驚きの反応はない——、一名を除いて。

その一名とは、ここ数日前に教会のエクソシストから悪魔に転生したという前代未聞の人物。神の不在を知り破れかぶれで悪魔に身を落とした聖剣デュランダルの担い手、ゼノヴィア・クアルタだ。

初めて会った時から危なっかしいところもあつたが常に冷静で激しく感情を揺さぶられることの少ない彼女だが、今はそれも見る影がないほどに動揺して座っていた椅子から転げ落ちていた。

彼女は肘掛に手をかけて上半身だけ起こすと、震えた声でアーシアに尋ねた。

「あ、アーシア。その十香というエクソシスト、もしかしなくとも七星十香さまのことか……?」

「は、はい。その十香さんです」

「あつたことがあるのか!」

「きゃっ!」

クワツと、これでもかと目を見開いたゼノヴィアが悪魔の身体能力をフル活用し、一瞬にしてアーシアの眼前まで詰め寄っていた。あまりの早さにイツセーは口をあんぐりさせるほかなかった。

「十香さまにあつたことがあるのか!?! どうなんだアーシア!」

「ぜ、ゼノヴィアさん……!?!」

「お、落ち着けゼノヴィア! どうしたんだよ突然。その十香つて人がそんなに気になるのか」

激しい問いかけに答えられずにいるアーシアに助け舟を送る……が、グワンと顔だけ

を向けてくるゼノヴィアを見て早まったかもしれないと後悔が押し寄せてきた。

「気になるも何も教会にいたエクソシストならば誰しもが一度は耳にし、そして憧れる存在さ！ 主である神が何千年の時をかけて生み出した最強の神器を授かったまさに神の代行者！ 近い将来『天界の暴拳』とまで呼ばれたヴァスコ・ストラード殿下すらも超える最強のエクソシストになると確信されている。それが七星十香さまさだっ！」

「そ、そうなか」

血走ったゼノヴィアが怖くて内容がいまいち入ってこなかった。が、そんなこと今の彼女に知られてしまえば……考えるだけで背筋が凍る思いだ。

「とても美しい容姿をしているらしくてその姿はまさに美の神、完成された美と言われほど整っているらしい！ さらに美しさだけでなく天使のような優しさも叶え備えたまさに女神！ ああ、一度だけでいいからそのお姿をこの目に写したかった！ もはや悪魔に落ちた私では彼の方を視界に入れることすら罪深い—————」

「いい加減とまりなさい」

ブツブツと呪文のように呟きはじめたゼノヴィアの頭がガクンと揺れる。

リアスがどこから取り出したか不明のハリセンでゼノヴィアの頭を叩いたのだ。

スパンツ！ と小気味良い音が部屋に響く。

ハリセンを振り抜いた格好のリアスに、うつむいたままのゼノヴィアを心配そうに見

つめるアーシアというなんともシュールな光景が出来上がっていた。

リアスがため息をこぼしながらハリセンを朱乃に渡す。

「全く、熱くなりすぎよ。まあ、けどその十香って子には私も興味あるわ。敵勢力のことは知っておいて損はないだろうし」

そう言つてリアスがアーシアに向き直る。その顔には話してほしいという意味がありと現れていた。

「……………」

しかしそれはアーシアにとつて唯一の親友である十香を裏切る行為に等しい。先日起きたことを話すのには抵抗はないが、それ以外となると話は別だった。

かといつて命を救つてくれたリアスに対して不義理なことはしたくない。

親友と主人。板挟みになり頭を悩ませるアーシアに助け舟が出されたのは突然だった。

「その必要はないよ。リアス」

突然、オカルト研究部の扉が開かれたかと思うと二つの人影が入ってきた。

その人物にリアスが肩を揺らした。

「お兄さま!? それにグレイフィアまで……………」

リアスが驚きに声を震わせている刹那にその場に跪く眷属たち。新米のイツセーは

当然、アーシアもゼノヴィアも疑問符を頭上に挙げたが相手が現四大魔王と知るとすぐさま膝を折った。

「お、お兄さま、どうしてこちらに？」

いつも余裕のあるリアスがしもどろになりながら兄であり魔王であるサーゼクスに問いかける。すると魔王サーゼクスはオフだから楽にしてくれと前置きして、懐から一枚のプリントを取り出した。

それは授業参観の案内。

リアスの表情がみるみると青くなっていく。

「ま、まさかお兄さま、そのプリントは」

「グレイフィアが教えてくれてね。是非とも愛し妹が勉学に励む様を見たかったのだよ」

「し、しかし！ 魔王であるお兄さまが一悪魔を特別視するのはいけませんわ！」
と、ささやかな抵抗を試みる。

「いやいや、これは仕事でもあるんだよ。例の三すくみの会議、それをこの学園で行おうとおもってね。今回の授業参観はその下見も兼ねているのさ」

リアスを含めた全員が驚く中、サーゼクスは言う。

「この学園とは縁があるようだ。赤龍帝や白龍皇だけでなく《天使》すら現れた。偶然に

してはできすぎている」

「《天使》……さきほどお兄さまがおつしやられたその必要はない、とはどういう意味でしょうか？」

「どうやらリアスたちが出会った《天使》に選ばれた少女が今回の会議に参加すると、天使長のミカエルから私の元に連絡が来てね。おそらくアザゼルの元にも連絡が入っているはずだ」

『……………ツツ?!』

これには全員が息を飲んだ。

特にアーシアはもう一度十香と会えると言うこともあり、その表情はいつにも増して輝いていた。

ゼノヴィアは……語るまい。

そこからはイツセーが泊まる所のないサーゼクスを家に招待したり、そのせいでリアスが拗ねたりと、賑やかな1日を過ごした。

そんな賑やかさから少し離れた場所ではアーシアがある決意を胸に刻んでいた。

◇

「……………はあ、どうしよう」

思わずこぼしたため息が真つ白な空間に溶けていく。

遮蔽物のない、文字通り真つ白が広がるこの場所は、天界の第三天。一般にいう天国と呼ばれる場所で、少女、七星十香は一人悩みを抱えていた。

白が広がる空間でポツリと浮かんだ夜色の髪を流し、水晶のように綺麗な瞳は憂いを帯びている。

いつもの天界を照らす笑顔はそこになかった。

しかし、たとえ悩みに揺れていようがその一挙一動は他者を魅了するだけの色気を放っている。

「はあ」

再度ため息。

すると十香の周りに手のひらに収まる程度の光がごまんと集まってきた。

悩みに両手で顔を覆っていた十香はそれに気づかない。

ふわふわと漂う光たちが十香の四方に溢れかえったとき、ようやく違和感に気づいた十香がふと覆っていた両手を剥がし――、

「わ、わわっ！　いつのまにみんな集まっていたの？」

その数に圧倒された。

まるで十香の周りに光のカーテンがかかったみたいだ。

その光景に思わず綺麗だと目を奪われる。

「すごい……信徒の魂達が一箇所に集まるところなるんだ」

信徒の魂……それが光たちの正体だった。

ここは天国であるため亡くなった人の魂が行き着くのも不思議ではない。

先頭に躍り出た魂がふわふわと十香の近くまでよってくる。

それを割れ物を扱う以上に慎重に両の手のひらに迎え入れた十香は首を傾げた。

「どうしたの？」

一見、光の玉に話しかけている危ない人のように見えるが、それは違う。

理由ははつきりしないが、この天界にて十香のみは彼らと意思疎通が可能なのだ。

と言っても直接話すのではなく、漠然と脳内に流れてきた感情を十香が解釈して確認のために口で聴かせるのだ。

今の問いに帰ってきた感情は心配。

つまり彼らは十香を心配して集まったということになる。

彼らの気遣いが嬉しい反面、心配をかけたことを申し訳なく思っていると、ふいに心

配以外の感情が伝わってきた。

(この感情は……いたずら………)

「つて、イタズラっ!？」

十香は流れてくる彼らの感情を読み取り、頬を膨らませた。

「私を驚かそうとしてこっさりみんな集まったつて言うの。もう、みんなして意地悪だわ」

と、言ったものの、イタズラ大成功! とばかりにはしやぎ回る魂たちを十香は母親のような気持ちで見守っていた。

そんな中、ひとつの光が十香の手に降りてきた。

「なにをそんなに悩んでいるのか……? そうだね、聞いてもらおうかな」

十香は周りの魂たちを見回しながら口を開いた。

「これから先、争いが起きるの。それも全勢力を巻き込んだとても大きな争いが。もう誰にも止められない。敵はもう目の前にまで迫っているから」

いつのまにか、はしやぎまわっていた魂たちは再度集い、光のカーテンへと変貌していた。

「天界でそのことを『識っている』のはきつと私だけ。お母さんもミカエルさんも知らないこと。本当ならこのことはすぐにでもミカエルさんたちに報告するべきだと思う。

でもー」

十香は争いが嫌いだ。傷つけるのも、つけられる者を見るのも嫌だった。

最近になって、あまり使いたくない『とある天使』を使い識った内容であるため確実な情報だ。

情報とはいつの時代も武力以上に武器になる。今知ると、あとで知るのでは天と地ほど被害が変わってくる。

しかし今伝えればどうなるだろうか？

敵は悪魔、墮天使、天使の危険分子。間違いなく天界の裏切り者を炙り出そうと上は動き出すだろう。

それは十香にとって一番避けたいこと。

大好きな天界で、大好きな人たちを疑う。そんなこと十香の心が耐えられるはずがない。

『とある天使』をもってすれば裏切り者の天使を知ることが可能だったが、知るのが怖くてそれ以上先を見ることができなかった。

今、伝えれば自衛の準備が間に合うかもしれないという思いと、伝えれば大好きな天使たちとの戦闘が避けられず天界が戦場になってしまうという思い。

十香はどちらを取ればいいのか、凄まじい葛藤に頭を悩ませていたのだ。

「やっぱりここにいたのね。十香ちゃん」

現れたのはゾツとするほど整った容姿をした美少女だった。

広げる翼の数は熾天使を証明する12枚。

風のない空間にもかかわらず揺れ動く髪はその都度プリズムのような光を反射させ虹色のように見える。

外見はざつと20代前半といったくらいだろうか？ 服を押し上げる豊満な胸は張りがあり、シミひとつないシルクのような肌は眩しさを覚えるほど滑らかだった。

まさに天使と言う名を体現してみせる美少女だが、しかしその正体は一児の親である。

天使でありながら子を成すという前代未聞の出来事を成した女性の名はジブリール。

その容姿とは裏腹に大戦時代数多くの悪魔、墮天使を屠り、《殺戮天使》と恐れられた

《天界》最強の天使でもある。

そんな女性とも少女ともとれる天使の来訪に十香は顔をひきつらせた。

しかしそれも刹那の間。

すぐに笑顔を浮かべた。

「あ、お母さん。どうしたの？」

ジブリールの子というのが何を隠そう、七星十香なのである。

「夕食の時間になっても帰ってこなかったから、またここで時間も忘れて行き着いた信徒の魂たちと遊んでいるのかもと思ってきてみたのよ。まあ、案の定だったけど」

「あれ？ もうそんな時間？」

「ここは天国。」

空が存在しない以上朝も来なければ昼も夜もない。意識的に時間を気にしていないとつい、今の十香みたいに時間の感覚が狂ってしまう。

「ごめんさい。すっかり夢中になっちゃって」

「いいのよ。ここの子たちも十香ちゃんと遊べて嬉しいはずだから……って、あら？」

十香の周りに集まっていた魂たちが急に十香とジブリールの間に、壁になるように再度集まり始めた。

困惑の表情を浮かべるジブリールをよそに、魂たちからおくられてくる意思を汲み取った十香は、魂たちの突然の行動の意味を知り、クスツと母に向けて笑みをこぼした。「私を連れて行く悪い人がきたって。みんなが私をお母さんから遠ざけようとしてるんだって」

「な、何ですって……！ こんなにも美しい美女を前にして悪い人だなんて、見る目がなさすぎるわ！」

「だけど、私を連れて行く悪い人には変わらない、だって」

「こ、こんのおくつ生意気よつ。とつつかまえてお仕置きしてやるわよ！」

顔を赤くして魂を捕まえようと奮闘する母と一生懸命逃げ回る魂たち。熾天使から逃げられるはずもなく難なく捕まってしまう。

ジブリールから逃げようと必死にもがく魂を見て、そろそろ助け舟を出してやることにした。

「お母さん、その辺にしてあげよう。この子たちも本気でお母さんを悪者だとは思ってないよ」

「つくかくまくえくたく……って、そのくらい分かっているわ。ここに行き着いた魂たちが私たち天使を軽視するはずないんだから」

ジブリールが拘束を緩めると淡い光がシャボン玉のように舞い上がっていった。

遊んでもらったお礼を行動で示したいのか、等しき十香たちの周りを漂った後、魂たちはチリジリに散らばっていった。

生まれてすぐに不運が重なって亡くなってしまう魂たち。

そんな彼らが今、少しでも走り回って楽しく過ごせられるなら幸いだ。

いくら天使と言われていようが、十香たちではこの程度のことくらいしかしてあげられないのだから。

光が真っ白なこの世界に溶け込んで行ったタイミングで、ジブリールが翼を広げた。

「ここにきた目的を忘れていたわ。ほら、早くもどましよう！」

年甲斐もなくはしゃいだのが恥ずかしかったのか、ジブリールがほんのりと頬を朱に染めながらそう言った。

「……………うん。わかった」

飛び立つジブリールの背中を十香は罪悪感に襲われる気持ち在必死に隠しながらポツリと言葉を漏らした。

「……………めんなさい。お母さん」

すでに空にいるジブリールには届かないその呟きは真つ白な天国に溶けて消えていったー。

10 話

薄暗い森林に囲まれた緑の中。

街灯は届かず太陽の日差しさえ背の高い葉に遮られたその場所に、教会はひっそりと建っていた。

建物の外装は所々が剥げており、何年も放置されていたことが窺える。

入り口に構えているはずの大きな両扉は教会の中、聖堂の長椅子や装飾品を巻き込んで派手に破壊され、みるに耐えない惨状が広がっていた。

「前も見ただよやっぱり酷いなあ」

前回、コカビエルの一件の時に訪れたこの教会はすでに廃墟と化していた。

今日はその掃除に来たのだが……やはり目を覆いたくなる。

聖堂内へ足を踏み入れるとすぐに足元からパリンと何かを踏み砕いた音がした。

足をどかせるとそこにはガラスの破片が粉々に散らばっていた。視線を少し前に動かすだけで無数の破片が落ちてくる。顔を上に上げれば本来見えないはずの葉がこちらを見下ろしていた。まるで今更何しにきたのかと睨まれているようで落ち着かない。

廃墟になるまで何もしなかったこちら側の落ち度だ。責められたとしても言い訳のしようがない。

「これ、《刻々帝》で戻そうとすればどれだけの時間を消費しなければならないんだろう」この教会がいつから使われなくなったのか調べてみないとわからないが、数十年はくだらないだろう。

流石に十香も《刻々帝》を使う気はさらさら無いが、この惨状を目にすれば一瞬でも思考してしまうのは仕方ないことだった。

「でも、仮に《刻々帝》が使える範囲内だったとしても、こればかりは自分たちのでくないとダメだよね」

それが放置していた自分ができるせめてもの罪滅ぼしだと考えている。

それにこの教会を綺麗にしておくことは今後『必ず役に立つだろう』。

十香は一度教会を出ると街につながる一本道に視線をやった。

深い緑を巻くようにカーブして降る道はここからでは下まで見えない。

「もうそろそろ来ると思うんだけど……あつ」

道の切れ目から姿を見せた人物に、十香はそつと声をあげる。

その人物の左右の手には大きな袋が一つづつ握られていた。その人物も十香の視線に気づいたようで、微笑みを向けてきた。

「遅くなってすまない。人間界で買い物なんてずいぶん久しぶりだったものでな、時間がかかってしまった」

「だから私が買いに行くよって言ったのに」

「十香に買いに行かせたらそれこそ日が暮れてしまうよ」

「むう、どういふことっ?」

「ははっ、言葉通りの意味だよ」

「そうやっていつもはぐらかす。ホーネストさんのそういうところ直した方がいいですよ」

「大丈夫だ。僕がこんなふうに接するのは十香だけだから」

そうやって十香の頭を撫でる男性の名はホーネスト。

十香が待っていた人物であり、今日、この教会を掃除する助っ人の一人だった。

ついさっきまで掃除に必要な道具を買い出しに行っていたのだ。

わざわざ買いに行かず天界から持ってくればよかったのだが、今後も定期的に掃除することを考え新しく買っておこうと十香が提案した。

ホーネストがしゃがみ込み、袋をあさる。

すると彼の綺麗な金髪が余すことなくあらわになる。お目当のアイテムを掴み顔を上げると、宝石のようなエメラルドグリーンの瞳に十香の姿が反射した。

吸い込まれそうになる感覚に陥りそうになり振り払うように首を左右に振ると心配そうに彼が顔を覗き込んできた。

「大丈夫か？」

女性の肌みたいない白い肌と端正な顔たちが目に入り、少し距離を取る。

「大丈夫だよ」

笑顔でそう応えると、ホーネストもうなずいて離れていく。

俗に言うイケメンと呼ばれる人種のホーネストは優男のような外見ながらも、その実、上級天使に名を連ねる強者である。

光力の扱いにだけ、その濃厚な光で数多くの悪魔を屠っていたようだ。

さらに言うならば、彼は十香にとって特別な存在である。

色恋、というわけではない。

十香にとってホーネストとは兄のような存在なのだ。

物心ついた頃から自分の面倒を見てくれた彼を十香は慕っている。

真つ直ぐで人と真髄に向き合い想う気持ちを忘れないその姿勢に、ジブリールの次に憧れている天使でもあったりするのだが、それを口にしたことはない。

何故なら、そんなことがジブリールの耳に入れば大騒ぎになりホーネストに迷惑がかかるからだ。

娘が男を尊敬している。

そんなことジブリールが黙っているはずがないのだ……………。

道具が揃ったことでやるきを見せる十香に、ホーネストがポツリと訪ねてきた。

「今日はだいぶラフな格好なんだな」

今の十香は黒のロングTシャツにカーゴパンツというシンプルな服装だった。

十香の起伏のある体つきを浮き彫りになっているその様は異性には毒である。

十香は自分の服装を見下ろしてから首を傾げた。

「変……………かな?」

「変じゃない。とても似合っているが……………十香。君はもう少し自分がどう見られている

のか知った方がいい」

「…………… どういうこと?」

意味がわからず首を傾げる十香。その仕草も大変可愛らしい。

ホーネストが額に手を当てて空を仰いだ。

ついでにため息も漏れる。

もしかして買い物で疲れたのだろうか?

最近天使の仕事が忙しそうだったため、その疲労がまだ残っているのかもしれない。

十香はホーネストが持つ箒に手をかけながら言う。

「ホーネストさんは少し休憩してて。私だけでも先に初めておくから。しつかり休んでから来てね」

「えっ? いや、僕は大丈夫……って十香っ」

箒を奪われたホーネストが抗議の声を上げるが、十香は念を押すように笑みを向け黙らせた。

「手伝ってくれるのは嬉しいし、ありがたいけれどそれでホーネストさんが倒れでもしたら大変だわ」

「僕は……」

「それに最近是天界にもいないようだし、忙しかったんでしょ? だから今は休んでて。」

その間は私一人で頑張るから!」

箒を動かして地面を撫でる。

様になっている。いるのだが、

「十香っ、そんな勢いよく掃いたらー」

「わわっ!! 埃が……けほっ、けほっ……!」

「ー埃が舞うよって、遅かったか。ほら、これをつけてからにしな」

そう言っつてホーネストが取り出したのはどこにでも売られている市販のマスクだった。

あるなら先に渡して欲しかった。

箒を奪って勝手に掃いたのは自分だが……。

隙間がないようにマスクを密着させる。

あと、ガラスの破片や折れ目が鋭く尖った木材で怪我しないように軍手を装着して準備完了である。

「始めようか」

こうして十香は長きに渡る戦いへ向かったのだったー。

☆☆☆☆

廃墟と化した教会を綺麗に清掃するのは流石に1日2日で終わるはずなく、一週間にわたり続いた。

ホーネストは仕事があつたのと、それに伴って疲れが見えたので初日を除いて2日ほどしか参加させなかつた。その代わりに他の天使や、教会のエクソシストが手伝ってくれていたため十香一人に負担がかかることはなかつた。

掃除は終わった。あとは内装を飾るのみ。それについては専門の人が来てくれるそうなので、十香が手を出すのはここまでだ。

聖堂内をゆつくりと左から右に流していく。みるも無残な光景は今ももうない。

壊された扉や長椅子は撤去され、散乱していたガラスは小さな破片ひとつなく掃き出

された。

「ん〜！ すつきりしたあ！」

圧倒されていた教会内がいまでは広々と観じられる。

空を仰げばガラスのない天井からオレンジ色が覗き込んできた。もうじき日が完全に暮れる。

日が落ちる前に帰らなければジブリールが心配してしまふ。そうなれば面倒なことになる。

十香は教会から出ると昨日と今日手伝ってくれた人物へ声をかけた。

「お疲れ様です。ジェズアルドさん。多忙なのに2日間も手伝ってくださってありがとうございます。うございました。おかげで予定通り終わらせることができました」

「いえいえ、俺の方こそあの七星十香さまと一緒にできて光栄でした」

そう返したのはグリーンの瞳を持つ、神父服に身を包んだ青年だった。

名をデュリオ・ジェズアルド。2番目に強いとされる上位神滅具『煌天雷獄』の所有者で「教会一やさしいすぎる青年」と称されている人物である。

彼の趣味で美味しいもの巡りで近くに来ていたところ派遣されてやってきたのだ。

そんな彼へ十香は優しく微笑む。

「十香でいいですよ。さまざまありません。同じ主を信じるもの通し、他人行儀すぎるの

も寂しいですから」

「だったら俺のこともデュリオと名前ではしいな。十香ちゃん。ついでに敬語も無しだとなお良い」

最後に少しおどけていう彼にクスツと笑みを溢す。

「ふふ。わかった。これからもよろしくね、デュリオさん」

「よそしく、十香ちゃん」

お互い握手を交わしたあと、掃除で使った道具の片付けを始めた。

と言っても基本物はこの教会に置いていくので定位置が決まるまでまとめ一箇所に置いておけば良い。

それが終わると本当に終了だ。

日もだいぶ傾いており、そろそろ天界側から門が開く時間だ。

と、ちょうど教会の側で白い輝きがあたりを照らすと同時に皓々たる巨大な扉が出現した。

眩しそうに目を細めるデュリオへ十香はある提案を投げる。

「そろそろ家は夕食の時間なの。私が作るんだけど、せっかくだから貴方も一緒にどうかしらっ？」

「ここでデュリオとはお別れだが、わざわざ貴重な時間を割いてまで来てくれた彼をそ

のまま返すのは気が引けた。そんな思いで出した提案だったが、デュリオは口惜しそうに首を横に振った。

「十香ちゃんの手料理……非常に魅力的なお誘いだけど、今日は近くの施設の子供達に料理を振る舞ってあげる予定なんだよねえ」

「そういうことなら無理はしないで子供たちを優先してあげて？ きつとみんなも貴方の料理を楽しみに待っているはずだから」

実は十香はデュリオの美味しいもの巡りの本当の理由を知っていた。

彼は施設から出られず、美味しいものを食べられない子供たちのためにそれを再現して食べさせてあげているのだ。今日振舞う料理も、きつとそういった子供たちのためだろう。

飄々として掴みどころがない人物だが、その心は本物の天使のように優しい。

十香は彼を心から尊敬した。

「もし、まだこの街にいるというのならここに来てください。こちらから門を開きますのでその時にでも一緒にお食事と一緒にしましょう」

「絶対に行くよっ」

食い気味のデュリオだった。それほどまでに十香の料理を食べたかったようだ。作る側としては期待されるのは緊張する反面嬉しい。

十香は満面の笑みを浮かべて胸の前でこぶしを作ってみせた。

「うんっ、私も腕によりをかけて作るから楽しみにしてて。それじゃあ、待ってるね？」

デュリオの姿が見えなくなるまで見送った十香は先ほどの彼の表情を思い出していた。
た。

「顔、すごく赤くなっていたけど大丈夫かな？ 風邪とかじゃなければいいんだけど

……」

少し心配だが、彼は大丈夫だと言っていたのでそれを信じるしかない。

後日顔を出すと言っていたので、その時にでも体調を伺って、悪そうなら休ませてあ

げよう。

彼が来る日を密かに楽しみと一抹の不安を抱きながらも白亜の扉を潜るため足を浮かせ――、

「――見つけた。未知の力の持ち主」

「つ――！？」

突然現れた気配に全速力で後退した。

十香は今し方自分のいた場所に目を向ける。

人がいた。

小さな人型のシルエット。

気を緩めていたとはいえ、全く持つて気配を感じることができなかつた十香の背筋に冷や汗が伝った。

相手に殺す気があれば終わっていた。

まるで存在が感じられない。

そこにいたのはゴスロリ衣装を身につけた幼い女の子だった――。